受け継がれる縄文魂

縄文の遺伝子

佐藤眞生

表紙画／安芸早穂子

縄文魂は今も生きている

縄文人は、今を遡る約一万三千年前から弥生時代が始まる三千年前までの一万年を日本列島で暮らしていた。

日本という国号が正式に使われたのは六八九年の浄御原令であるが、その後今日に至るまでに日本列島も日本も大きく様変わりしてしまった。そして、縄文人は歴史から殆ど抹殺された状態にある。考古学が盛んな発掘情報を取り上げはするが、その実態は考古趣味の域を出ない。日本列島や日本の歴史を問い直すようなところまではいかない。

にもかかわらず、縄文魂は日本人の底流に今も息づいているように思われる。確かに現代の日本人はか弱い。ハッキリしない。半端である。それが、縄文を辿るとにわかに逞しくなる。そして、実際に頼りになる人々が目の前にいる。その背骨になっている風習があり、祭りがあり、言葉があり、体に残っている痕跡もある。そういう一群の人々も現存する。日本の始原である縄文は間違いなく現代に実在する。

縄文魂は今も生きている。本質的な問いかけがあると、それは首をもたげる。芯は強いといわれる日本人の底流には縄文魂がある。私は、それを探りたい。日本人の真髄である縄文魂の実在に迫ってみたい。

それは多分、伝統的な風習に形をとどめている。成人や結婚、誕生や死、それに自然採取の規範や禁忌の風習には縄文の継承が潜む。

祭りにも縄文魂は継承されている。動物にかかわる祭りや山川草木を対象とした祭りには縄文からの流れがある。

言葉、とりわけ地名や方言や天災の呼び方などに縄文が顔を出す。これらは容易に変わらないからである。

体に残る縄文はいわば決定的である。そして、それがひとかたまりの規模になって残っているのがアイヌや沖縄や家船（えぶね）や山家（さんか）ではないかと思う。

私は現代に残る縄文魂の系譜を追いながら日本の始原を明かしたいと思う。

縄文の遺伝子／目次

はじめに・・・「縄文魂は今も生きている」　3

一、風習に残る縄文　・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

1　久高島の誕生儀礼　10
2　誕生の儀礼　13
3　大人になる試練　17
4　ワケエモノ（若者）　19
5　婚　礼　22
6　久高島の婚礼　27
7　大いなる死　31
8　沖縄久高島の葬送　34

9　葬送儀礼　37
10　村　掟　48
11　ユ　イ　53
12　食の禁忌と儀礼　56
13　川がたり　59
14　二十四節気　61

二、まつりに残る縄文　……………　65

1　まつり　66
2　琉球の祭祀　68
3　ねぶた祭り　73
4　那智の火祭り　77
5　諏訪御柱　79

6　早池峰の賦　82

三、体に残る縄文……………………85

1　心は腹にある　86
2　切　腹　89
3　現代日本人の体に残る縄文人の痕跡　92

四、種族に残る縄文……………………95

1　アイヌの自然観　96
2　山　家　100
3　家　船　102

五、縄文の末裔 ……………… 107

1　岡本　太郎　108
2　宗　左近　110
3　笹谷　政子　112
4　司馬遼太郎　117
5　五木　寛之　123
6　今西　錦司　126
7　西岡　常一　130
8　甲野　善紀　135
9　宮崎　駿　139
挿絵作家の言葉「縄文の手ざわり」／安芸早穂子　142

本文挿画／安芸早穂子

風習に残る縄文

1　久高島の誕生儀礼

久高島では、新生児は神から授けられ、その死は悪霊がもたらすと考えられていた。特に、生後一年は悪霊に奪われやすいと思われていて、悪霊から幼児を守るさまざまな儀礼が行われた。

○ 五体満足な出産と安産のための禁忌

（一）足を曲げて寝るな。
（二）妻が妊娠中の夫は死者の棺を担ぐな。
（三）葬式に行くな。
（四）死者の出た家の室内に入るな。
（五）死者を納棺するところを見るな。
（六）口裂唇の子が生まれるから欠けた茶碗を使うな。

（七）胎児の臍が曲がるから夫はタオルを首に巻くな。
（八）お産が軽い犬にちなんで五ヶ月目の腹帯を締める日は戌の日を選ぶ。

○ 悪霊から新生児を守るためにすること

（一）産室に塩を置く。
（二）産家の門口に古い布地で綯った縄に火をつけ、夕刻から夜じゅう置く。
（三）生後六日間は祖父母の古着で新生児をくるんでおく。
（四）生後七日目から着せる産着の後ろ襟に、悪霊除けの赤布を縫いつける。
（五）外出の時には新生児の額に鍋墨をつける。
（六）新生児の誕生年の干支が両親より前の時、干支が先にある親が仮の親になる。

○ 子どもは親（祖先）の生まれ変わりであるという考え方

（一）祖父の霊が宿りやすいように、生後三ヶ月ごろまでの男児の前頭部からつむじにかけて細長く毛を剃った。これを親の道（エーミチ）という。

（二）生後四日以後の吉日に、新生児の名付（ナーリイキ）が根神（ニーガン）によって行われるが、予め申告された祖父母の名前を、神意によるものというかたちで承認する。

○ 子どもは太陽神から授けられるという考え方

（一）名付が終わった吉日の朝、太陽拝み（テイダウガマシ）の儀式が行われる。腰部を結んだ下袴を頭からかぶった産婦が赤児を抱いて当家の前庭に出て、東に向って座し、赤児に太陽を見せる。

久高島では子どもがたくさんいて子孫が繁栄している家を「栄えている」と考える。子どもは親（祖先）の生まれ変わりだから、子どもの誕生は命が続いていくあらわれなのである。

「日本人の魂の原郷沖縄久高島」・比嘉康雄著参照。

2　誕生の儀礼

産　飯

赤子が生まれるとすぐに、白米のご飯を炊いて子の出産の祝膳をつくり神棚と子供に供える。ご飯をお碗に高く盛りあげるのでお高盛りと言う。赤子の年取りの膳とか、ウブタテの飯とか、オビタテ御飯などとも言う。ご馳走には魚が必ずつき、豆腐汁・ぜんまい・麩・芋などがつく。これを赤子に拝ませてから、産湯を使わせる取り上げ婆さんが食べ、手伝いや見舞い客にも食べてもらう。産飯のご馳走を食べた人たちはお七夜まではウブスナの鳥居をくぐったり、宮参りをしてはいけないという風習がある。このお高盛りは一生に三度行われる。生まれたときの産飯と、結婚したときと、死んだときの枕飯である。

産　湯

初湯とも書く。血穢を洗い清める禊である。最初の産湯を後産のさがる前に使わせる。最初の一回はオハチの中でする。使ったお湯は一回だけ寝間の下に捨てる。産湯は肥桶（タナ）に捨てる。男児は十九タライの湯を使い二十日間、五十日間とか百日間という地方もある。女児は二十タライで二十一日間とされるが、地方によっては三十日間というところもある。産湯のお湯は釜で沸かすが必ずふたをする。そして産湯にはお湯を先に入れる。死んだときの湯灌は水を先に入れる。また、産湯で使うのが産着であるが、これに対応しているのが死装束である。

へその緒

へその緒はヨシで切る真似をしてから、子供に拝ませ、ハサミで切る。そのヨシを男児は鎌で、女児は包丁で七本に切る。へその緒とヨシは後産と一緒に産室の下に埋める。地方によっては、癌や腹の虫の薬として取っておいたり、便所の綱の根元に下げたりする。

初養い

生後初夜・三日・五日・七日・九日目の夜に祝宴が行われる。現在はこの内、お七夜だけが残っており、命名式が行われる。産家は親族から祝いの品を受け取る。かつては祝いの品は食物であった。これは共食によって同じ仲間に入るという信仰に基づく。

お宮参り

生後、男児は三十二日目（五十日目の地方もある）、女児は三十三日目に、土地の神である産土神の神社へ初参りをする。これは村落共同体の一員としての参加の儀式である。これによって赤子は土地の一員となり、村人として血がつながる。神社から「はだ守り」をもらいあるいは赤子の「額に印」をつけてもらう。男児は筆で墨・黒い星・紅をつけてもらう。女児は紅・赤い星・お白粉をつけてもらう。お宮参りの帰りに、赤子は近所の子供たちと共食する。これで赤子は神の氏子となり、村人と擬制血縁関係が成立する。子供は七歳までは共同体の一員であると同時に神の子とされていた。家や個人の生活も

実際上も精神上も、共同体が前提となって成立していた。このお宮参りは葬送儀礼でいう忌明けに対応している。

食い初め

生後、女児は百十日目、男児は百二十日目に食い初めの儀式が行われる。赤飯が必ずつく。取り上げ婆さん、孫じいさん、孫ばあさんを呼び、まずお膳を子供に拝ませてから、そのお膳を取り上げ婆さんが食べる。子供には飯つぶを口へ入れてやる。

拾い親・捨て児

六ヶ月目に歯の生えた子を鬼児といい、縁起が悪いので三辻の道に捨てる。これを近所の人に頼んで拾ってもらう。この拾い親とは少なくとも数年は義理の親子関係ができる。

誕生日

生まれて一年目の祝いである。取り上げ婆さん、親、本家分家衆を呼ぶ。餅をつき、箕の中に女児はハリバコやクケダイとともに入れ、男児はスズリ箱と一緒に入れ、立たせてお尻に餅をつけたり、背負わせる。

3　大人になる試練

しばらく前の日本には、大人の資格というか、一人前として認められる試練があった。例えば、次のようなものである。

＊奈良県大峰山の周辺の村々には、男子が一五歳になると大峰山に登り、東西ののぞきという断崖で、足を大人に押さえてもらって半身を崖からのりだし、人間としての道義を誓う風習があった。同じような風習は、青森県岩木山、中部の立山や白山、

四国の石槌山の村落にもあった。

＊山頂の神社に参詣したり、高山に山ごもりして一定期間隔離された生活に耐えるという試練も行われていた。

＊水垢離や精進潔斎で神主の家に泊まりこみ、一定の期間神事に携わるという試練もあった。鹿児島県では、七日間神社にこもり、最期の一夜は正座して明かす試練が続いていた。

＊首を締めて一時気絶させ、再び生まれ変わったという気持ちで新しい衣服をつけて宮参りする地方もあった。これは一度死んで神に新しい魂を入れ替えてもらうという信仰によるものであろう。

＊若者組加入の条件として、重いものを持たせて腕力を試したり、一定の作業をやり遂げさせるというものもあった。秋田県では、一定 積の畑を一日で耕させた。静岡県川奈村では、三角のマキの上に座り、太いマキで打つということが行われていた。

以上、「日本人のしきたりものしり辞典」（樋口清之監修）、「日本人のしきたり」（飯倉晴武編著）を参照。

これら大人になる試練は世界の先住民の間でも行われており、その共 点は間違えば死に至るほどの過酷さがあるということである。何故そうかというと、その極限状況の過程で失神したり、仮死状態におちいり、幻覚や幻をみることが重要なのである。この幻覚や幻が、その人間の生まれてきた役割を示唆しているからである。自分の役割を自覚した者が大人の仲間入りを許されたのである。

それまで成年式と呼ばれ、奈良時代以降は元服と呼ばれた男子の成人儀礼や成女式といわれる女子の 過儀礼があるが、これらは男子の場合、冠をつけたり髪をつかねて結ったり名を改めたりし、女子では、髪上げをし裳をつけお歯黒をし眉墨をするなど、形式的なしきたりであった。しかし、職人や商人の間にあった一二歳前後に行われた奉公は十年年季で、年に二日の休み（薮入り）しかなく、これは の意味で大人への試練であった。

4　ワケエモノ（若者）

学術用語では若者組といっているが、一的にはワケエモノ・若い衆・若連中などという。地域によってワカゼ＝若勢（東北）、ワカテ＝若手（東北～九州北部）、ニセ＝二才（九州南部～沖縄）などともいう。記録に現れるのは江戸初期だが、全国的に存在し、明治から大正期に青年会や青年団に変貌するものの、今でも残っている地方があることなどをみると太古からの系譜を予感させる。

ワケエモノは一人前の大人を育成する組織である。その殆どが祭祀組織と連動していた。男の子が十四～十五歳になると加入し、結婚するまで所属した。津軽地方の川倉の例では春彼岸の八日目にあたる送り彼岸の時に、ババたちが仏の供養をするために作る団子と酒二升を持って集まり、団子を食べて加入した。

加入式は特になかったが、地方によっては厳しい加入条件があった。例えば、三角槙の上に座らせ太い薪で打ちながら御条目を言い聞かせた（静岡県田方郡川奈）。「締め殺

す」といって首を締め一時気絶させた（長崎県西彼杵郡松島瀬戸）。西ののぞき・東ののぞきという断崖から半身を乗り出させ道義を誓わせた（大和大峰山）。一週間垢離（コリ）をとり丹前を着て神社でおこもりをしてからお山参詣をさせた（津軽川倉）。米俵や力石をかつがせるという例もある。

これは大人になるための死と再生だったのだろう。一度死に再生して大人になるという信仰があったのであろう。

ワケエモノは何をしたか？

第一は信仰行事である。氏神祭祀の神輿かつぎ・山車曳き・幟立て・屋台づくりなどという脇役を たした。しかし、ナマハゲ（秋田県男鹿半島）やアマメハゲ（石川県能登半島）では来訪神なので主役を任された。

第二は信仰行事と関連した民俗芸能である。獅子舞・太鼓踊り・念仏踊り・盆踊り、歌舞伎や浄瑠璃などの芝居、裸踊り・競馬・相撲、それにお囃子・綱引きなどである。

第三は村仕事である。警防、消防、災害の救援や修理、急病人が出たときの医者迎え、

道普請、植林、舟の揚げおろしなどである。賃労働としての雇いや借子（カルコ）に行く場合のワッパガ（割）、つまり、一日の労働の基準は明確に決められていた。男の場合、一日に三本鍬で田を一反歩鋤くこと、千歯による稲こきを五十把すること、田起こし一日三〜四俵取り、春木伐り一日一間、田植え一日四〜五俵取り、四斗俵をかつぐこと、一日二十貫の柴を運ぶこと、漁村では櫓のこぎ方や釣りの技術が定められていた。女の場合は男の仕事の半分くらいだった。田植え一日一反歩、除草一日一反歩などと決められていた。そして、村仕事に出ても一人前でないと分、つまり、差額分をとられた。

第四が性教育である。お山参詣の帰りに女郎屋へ連れていくという風習もあった。配偶者選びや婚礼への招待も行われた。

第五は社会教育である。一人前になるための躾と、違反した場合にはハジクという除名などの制裁もあった。ワケエモノには規約があり、御条目・掟・規定・取極などといい、博打や喧嘩や婦女子への悪戯などを禁じていた。

5 婚礼

結婚にまつわる儀礼は時代とともに簡略になっているが、今でも太古から受け継がれているものが全国的にある。そのありようを「日本民族の感性世界」(竹岡俊樹著・同成社)から要約してみよう。

出立の儀礼

祖先や氏神に対する挨拶が行われる。

両親との水盃などの盃ごとや本膳が行われる。

娘が家を出るときは、縁側から出る例が多い。抱き上げられて出る例や後ろ向きに押し出される例、むしろを外に巻き出してその上を って出る例もある。

娘が使っていた茶碗を割る。門口で藁に魚の頭を入れて焚く。そして、座敷をほうきで掃いたり、目籠をころがして掃きだす。

実家から婚家へ

道中の嫁の装いは、衣装は白衣、頭には白衣・カツギ・綿帽子・菅笠を被った。てぐいで口を覆い、蓑を着る例もある。半開きの蛇の目傘をさしたり（宮崎県）、蚊帳の中へ入って（沖縄県宮古島平良市）行列する例もある。

道中の儀礼としては、水・泥水・笹水をかける。石や雪 を投げる。塩をかける。村人がつくった障害物や張られた縄を従者が取り除く。村の境に竹でつくられた嫁の垣で番人に仲人が祝儀をやってる。

入家の儀礼

「盃ごと・水を飲む儀礼」

戸口で姑と盃を交わす。戸口で笠をかぶせて水を飲ませる。あるいは実家の水と婚家の水を混ぜて飲み、その盃を割る例もある（石川県）。

「またぐ・くぐる儀礼」

松明をまたぐ、下をくぐる、間を る、火の中を る。豆木を焚いた庭火をまたぐ。敷居・杵・竹ザオ・青竹・ワラタタキ石をまたぐ。

これに関連して、婚家に入るとき子供が十字にした松明で嫁の尻をたたく、嫁が敷居を越えたとき両側の松明を交差させて消す例もある。さらに、門をくぐる刹那、爆竹を鳴らす、鉄砲を撃つ例もある。

「足を洗う儀礼」

玄関前でタライで足を洗う、空のタライで足を洗う真似をする。

「はきものの儀礼」

はきものを入口で脱がせて嫁を背負って家の中へ入れる例と、入口ではきものをはきかえさせる例がある。草履をはいてきた場合には鼻緒を切って屋根に投げあげる。

「釜ぶたかぶせの儀礼」

釜蓋をかぶせられればもう里には帰れないといわれる。手伝いの女性が出迎えホウキや柄杓で招く（山口県）。

「笠・蓑笠かぶせ」

戸口で笠・傘・蓑をさしかける。

「婚家への入り方の儀礼」

かつがれて、抱かれて、背負われて入る。敷かれたむしろから上がる（愛知県）、むしろを内にまきこむ（大阪府）、後ろ向きに入る（大分県）。

台所口から入る。クドを三回廻って台所から上がる（京都府）。

家に入るとかまどの上にまつってある荒神様を拝む（埼 県）。

婚家での儀礼

屏風の中で三三九度の盃をすませ、祝宴を開く。嫁は吸い物あるいは料理が出るたび

に衣装を替える。着替えるごとに普段着に近づけていく。

嫁はハナツキメシやオチツキ吸い物を食べて婚家に融合する。

婚礼の穢れを忌みて仕事に出かけないとか（高知県）、嫁は一週間部屋を出ない（石川県）という風習もある。

このように婚礼の四つの場で実にこまやかな儀礼が組み立てられている。これは、嫁が実家から婚家へ完全に移動するというケジメなのであろう。しかし、人の時空の移動だけでは語れない要素、例えば、実家を出るときに縁側から出るとか、人に抱かれて出るというあたりをみると、実家と婚家の一体化、新たな親族共同体への思いもうかがわれる。

6　久高島の婚礼

戦前までは、男子が十五歳くらいになると男側の親が嫁選びをした。息子の意向は聞かない。嫁候補の両親に伝えると、娘の親も本人の意向など聞かずに決めてしまう。

親同士の話が成立すると、結び酒（ムスビダキ）という結納が行われる。日は決まっていない。結婚の数日前とか、数ヶ月前とか、一年前もある。

結納の後、両家で相談して結婚の日取りを選び、根神（ニーガン）に決めてもらう。

男側は結婚の儀式を行う三名を選ぶ。女側の親 から女性を選び花嫁の付き添い役の根引き人（ニービキンチュ）にする。伯叔父を仲立人（ナカラチンチュ）として仲人になってもらう。男側の親 の中から小学生以下の男児を選び伴（トウム）にする。

結婚式前に婿の友人、嫁の親 たちが共同で追い込み漁をし、お祝いのご馳走を用意する。

婿の婚礼衣装は嫁方で準備し、婿方は嫁方へ米一俵と酒三升を婚礼三日前に届ける。

婚礼当日夕刻、婿方から根引き人・仲立人・伴が嫁の家を訪問して、嫁の両親と盃の儀式を行う。終わると根引き人を残して早々に立ち去る。

三日前から実家を出て友人宅にいた嫁は支度をする。内衣は白の銅衣と下袴、外衣は

紺地の着物を帯なしでパンツにたくしこんでとめる伝統の着方で着る。髪は結い上げ簪を挿し、顔を隠す芭蕉布を頭から被る。草履を履く。十名以上の友達に囲まれて実家へ行く。

実家では木臼を逆さにして土を盛り松の木を燃やしている台所から、友達に囲まれたまま家に入る。

一番座に入ると、両親・親・根引き人が待っており、嫁は着物を被ったまま立っている。父親が酒盃を持って立ち、「今日からは○○家の嫁として子どもをたくさん産みなさい」と言って酒を娘の着物にかける。

この実家の儀式が終わると根引き人の先導で、友達に囲まれ、嫁は一番座側から家を出て婿の家へ向う。嫁は友達に囲まれたまま一番座側から婿の母親に迎えられて入り、友達とともに裏座に座す。

嫁が裏座に入ると婿が友人に伴われて一番座に入る。根引き人が持参した着物を、帯を後ろ腰に一回結びにしてひねってさしこんで婿に着せる。

婿は水椀を両手で取り飲む。裏座の嫁にも飲ませる。その後、婿は茅の箸でおにぎり

をつまみ、「アネーヒャー」（そら、でかしたぞ）と大声で叫んでから食べる。

これで婚礼の儀式は終わる。嫁は友達に囲まれて、台所から出て、婿側が予め決めた近所の家に移る。

婿方は婿方だけで祝宴をする。

その翌日の夜、両家それぞれで後祝いをする。

後宴の翌日、嫁は婿家が寝ている早朝、婿家の水汲みやお祝いの後片付けをして働き、婿家が起きる頃には実家へ帰って食事をする。昼は婿方の畑を手伝い、夕食の準備だけをして婿方を抜け出す。

嫁は婿から逃げる。後縁後は近所の家にも、実家にも泊まることができない。夜になると婿が探せそうもない友達の家や男が入れないフボー御嶽などに隠れて泊まる。

婿は友達数人と毎夜嫁探しをする。

昭和初期、嫁が逃げる期間を五日にしたが、それまでは一ヶ月でも二ヶ月でも長い場合には一年も逃げていた例もあったという。

婿は嫁を探しあてると力づくでつかまえ、二人の寝室である裏座へ入れる。つかまえ

られた夜から嫁は婿と寝ることになるが、最初の二～三日は婿の姉妹が二人の間に添い寝する。

何故、花嫁は逃げるのか？

多分、創世の神話の結婚の由来が関係しているのだろう。こうである。

久高島の最初の結婚は、始祖神のシラタル（兄）とファガナシー（妹）である。一緒に暮らしていた妹に兄が夫婦になろうと迫ったが、妹は木につかまって断った。兄は木を根っこごと引き抜いて妹を妻にしてしまった。

以後、結婚のことを「根引き」（ニービチ）といい、花嫁の付き添い人を根引き人（ニービキンチュ）という。

「日本人の魂の原郷沖縄久高島」・比嘉康雄著・集英社を参照。

7　大いなる死

羽仁進著「大いなる死」（光文社）で思い知らされたことがある。「魂」の概念についてである。彼は、魂は宗教の作り物であり、人間の可愛らしい想像だという。野生動物は同じ種が殺しあうことはないのに、人間は殺しあう。これは特殊なことであり、ここから不死の魂という概念が生まれたという。魂は、精神の美しい表現であり、深い気持ちや情念をあらわすものと思えばいい。

人間は肉体と精神からできているが、人間の死は肉体も精神も無にしてしまう。しかし、死とともに、魂は人間から離れて、再び新しい人間の肉体に再生する。宗教人でなくとも、そう信じている人は多い。

そう信じている方が安心できる。ところがである。実際には精神は死が、肉体は生まれ変わって生き残る。遺体は、新しい生命、つまり、バクテリアや微生物の素材であり、

新たな生命を与える存在である。それ故、彼は、人間が火葬をしたり、墓を作ることは、生物界に対する拒絶であると言い切る。

そのりである。全く同感である。

分裂を続けるが中身は同じ単細胞生物や、竹やポプラやクレオソートブッシュなどのような無性生殖生物には死がない。死があるのは、個のある有性生殖生物だけである。死の始まりは有性生殖にある。クローン人間は両親のＤＮＡのコピーで、無性生殖だから、個はないし、死もない。

両親の古い細胞は、化学物質や紫外線などで変質する。変質したＤＮＡと、新しいＤＮＡが混ざり合うと、ＤＮＡの存続そのものが不可能になる。このことを回避するために、体細胞に細胞死（アポトーシスとアポフォーシス）が組み込まれていて、古い個体ごと消去するのである。しかも、世代交代をしないと、新しい文化・芸術・思想は生まれない。ここに死の本質がある。

子は両親からＤＮＡを受け取り個をつくる。個はＤＮＡを存続させ、新しい文化の創造のために死が、生命は他の多くの生き物に受け継がれ、大いなる生に続く。人の六十兆に及ぶ細胞は、分裂を繰り返し、生き死にを繰り返すが、生殖細胞と癌細胞は生き続け、三十六億年前の生命の発生まで遡る。大いなる死は大いなる生そのものである。

8　沖縄久高島の葬送

沖縄本島南部の知念岬の沖合いに久高島という小さな島がある。この島の西海岸に阿檀林があり、その一部が後生と呼ばれている。死人が捨てられる場所だという。いわゆる捨て墓である。

久高島の葬送を辿ってみよう。

死者は水浴させ、新しい着物を着せる。着物は左前にして、襟に針七本を刺す。手は胸元で組み、膝は曲げ、頭は西向きにする。

訃報は村中に口伝えられ、村中の人が出て準備する。棺にはゴザを敷き、枕を置いて死者を入れ、裏返しで上下逆さまにして白衣をかぶせる。棺はシュロ縄で縛る。出棺は足の方から庭に出す。アカウマーという籠に棺を載せ、これをかつぐ七人の男たちが東に向って横一列に並び、「○○生まれの者がなくなりました」と唱えて合唱礼拝する。近親者がススキを束ねたものでアカウマーを叩きながら「あなたの葬儀のために米○○俵、酒○○升を使ったよ」と唱える。

葬列は決まった道を静かに歩く。集落のはずれまで来ると、葬列はとまり、アカウマーは死者の足を東に向けて置かれる。かついできた男たちはアカウマーの後方で東に向って座し、「○○生まれの者が亡くなりました。ニラーハラーの神様、受け取ってください」と唱え、合唱礼拝する。他の参列者もこれに合わせる。

それから葬所に向う。葬所までは男性神職者と近親者だけが行く。葬所に行かない人たちは集落のはずれで死者に「守る神になってください」と合唱して帰る。

棺を置く場所は昔から言い伝えで家によって決まっていたが、区画や標識はない。葬所へ来た者は、岩間や岩下に棺の頭部を北にして置き、「守る神になってください」といっ

て合唱してから葬所を立ち去る。近くの井泉で禊をし、後ろをふりむかずに帰っていく。

葬儀の日の昼は死者が使っていた敷物や着物を親 の者が禊用井泉で洗い、夜になると親 の者五名で、葬列が った道を鳴り物や弓、塩水でお祓いをする。

七日ごとに焼香儀礼を行い、最後の四九日には儀礼用の祭具もすべて片づけて死霊祓いが行われる。

風葬が行われていた時代には、葬儀の翌日、近親の女性二人で棺を開け、死者を見た。四九日まで毎日朝夕二回、お茶をもって葬所参りをした。寅年の旧暦十月二十日には村中一斉に水で骨を洗う洗骨も行われた。

この葬送は一九六六年までは久高島で行われていた。その年、外来者が風葬中の棺を開けて 真を撮り、それを雑誌に発表するという事件があって以来、風葬は行われなくなった。

風葬は人間が自然界の一員であることの証しであると思う。死体は自然にさらされ、他の生き物の糧となる。人間の死体は微生物や他の多くの生き物に受け継がれ、完璧に循環する。自然界では生は死に連鎖し、死は生に連鎖している。

人間が、今、死に対して行っているさまざまな制度、火葬や納棺や墓は自然界の生物

の摂理と縁遠い。火葬は死体を一方的に焼失させ、納棺や墓は外部との接触を遮断する。人間はそうすることで生物への拒絶を行っている。

久高島のように、人間はかつて捨て墓のほかに参り墓をもっていた。捨て墓は死体を自然の循環に委ねる場所であり、参り墓は故人の形見となる櫛や身につけていた装飾品を祀り、人間の魂に安らぎをもたらすものだった。

9　葬送儀礼

日本の葬送儀礼は昭和初期まで全国的に共 していた。恐らくこれは太古からの伝統的な葬送儀礼だったのであろう。それを要素ごとにまとめてみよう(「日本民族の感性世界」竹岡俊樹著参照)。

死水・末期の水

臨終に紙を水に浸して唇を らしてやる。これは死者がこの世・家・親族から切れることを意味している。

北　枕

死 とすぐ北枕にして寝せる。さらに、上畳を裏返す（青森県）、白い着物を裏返しに着せる（宮崎県）、枕をはずす（岩手県）、雨垂れの小石を拾って枕にする（愛媛県）、ござの上に裸で寝かせ着物を逆さまにしてのせる（香川県）などの例もある。北枕に寝せないと成仏できず魂が飛ぶといわれている。

顔をおおう布

顔に新しい手拭か白布をかけ、神棚に半紙か風呂敷を張る（青森県）。額に芋殻を十文字に結んでおき、顔を新しい布片で蓋う（佐渡）。息を引き取ったら膝を立てて曲げたままくくり（ツブシをくくり）、ハブツサヂという新しい手拭で 部を被う（喜界島）。顔をおおう布はこの世からの遮断を意味する。

逆さ屏風

座敷の中ほどに逆さ屏風を六角に立て死者をその中に置く。屏風越しに棺桶や死装束がもちこまれ、蓋を釘づけし蓋の顔の向いている方に卍で封じ書きをしてから逆さ屏風が取り払われる（青森県）。死者を置く部屋に幕を張って薄暗くする（沖縄）。逆さ屏風や幕で囲まれた空間はあの世である。

刀

枕もとや夜具の上に刃物や刀剣を置く。猫の霊が乗り移るのを防ぐのだといわれている。

神棚

死人が出ると神棚へ白紙に「閉」と書いて貼るか、笹葉のついた竹をあげる（神奈川県）。神棚の前にシアゲまで半紙を貼り下げるか、白扇子を開いて立てかける（京都府）。

神はあの世とは対立するものと考えられていたのであろう。

枕飯・枕団子

死者が常用していた碗に玄米一杯分の飯を盛り箸を中央に立てる（新潟県）。内庭へ梯子を逆さにかけ、臼を左廻しで白米の粉をひいて作った枕団子六個を枕辺へ供える（神奈川県）。死者があの世へ渡るしるしであろう。出産のときの産飯に対応している。

湯　灌

盥に水を先に入れ次に湯を注いで、線香をたきながら近親者が荒縄の襷をして死人を洗う（広島県）。死者に世話になった人が家移り粥という小豆粥を食べ酒を呑んでから、着物を裏返しに着て縄襷をかけ、敷居をまたぎながら、死人を洗って拭き、顔毛を剃り、死装束を着せる。この間、僧が経を読み、家人は合掌する（青森県）。二人くらいで藁縄の襷をかけ死者を抱き起こして新調の盥に入れ、髪を剃り体を清める。近親者は柄杓を右手に持って右へ返す左杓で水を注ぎかける（石川県）。死人の寝ていた部屋の畳を一枚

あげて盥を置き るま湯を入れて、身内の者が皆で洗う（兵庫県）。湯灌は誕生における産湯と対をなしている。

死者の衣装

白い着物を着せ、六文のあなあき銭（青銭）をつるした白い帯をさせる。白布でよった極楽縄を首から膝へかける。長方形の白紙を二つに折りたたんで死人の額にあてる（青森県）。死者に左オクミにして経帷子をつけ、左右を違えて足袋を履かせ、脚袢・草履で身を固め、首に頭陀袋を懸ける（神奈川県）。近親の女性が物差・鋏を使わず糸にコブを作らずに仕立てた晒木綿の白衣（イロ）をヒダリマエで着せる（広島県）。全国的に白い衣装に共 点があり、しかも、その作り方が女性と結びつき禁忌がある。この死装束は誕生の産着に対応している。

棺と卍・十印

棺と蓋の両方に十字を書く。蓋の顔の向いている方に卍で封じ書きする。死者の家に

×型の木片を打つ（青森県）。棺に白紙を貼り、納棺してから白紙を巻いた縄を十字にかけて棺の上で左結びに縛る（長崎県）。棺を縄で十字にくくり、死人愛用の衣服をかけ、その上に刃物・剃刀・刀剣をのせる。葬列がとおるお宮の前と死人の家の門口に青竹を十字に組んで石をぶら下げて立てる（福岡県）。卍や十字はこの世とあの世を区切る働きをしている。

音

出棺の合図に三度鉦を打ち、死人愛用の茶碗を門口の石で割る。途中の橋では僧がドラを鳴らす（愛媛県）。道路の曲り角で鐘を打つ（茨城県）。臨終と同時に鉦を叩く（岩手県）。これらは死人に向って音で時間と空間を区切っているものと思われる。

仮　門

棺は葦などをつけた蔀（シトミ）をくぐらせて出す。棺を担ぐ人は出掛けに樽やザルを踏み破ってからいく（青森県）。棺が家を出るときと寺の門に入るときは葦または細竹

の仮門をる（岩手県）。家の後ろをぶち抜いて棺を出す（福島県）。墓地入口の六地蔵に一の門、埋葬地入口に二の門を作り、棺が過した後刃物で崩す（奈良市大慈仙町）。

草　履

草履・草鞋・下 は家の中から履いて地 に下りる（青森県）。畳の上から、男は草鞋・女は草履を履いて下りる（京都）。

出　棺

出棺すると門口で束ねた藁を燃やし、死人愛用の茶碗を割る。箒で座敷を裏から外に向って掃く（京都）。出棺のときと寺の門前で、残米役が手篭の米を棺にかける（岩手県）。出棺後門火、つまり、括った藁を門で焚く（和歌山県）。火を焚くのは煙とともに昇天して、死者が再び帰らようにするためだといわれる。

出棺後の家

出棺すると、土間に灰をまき、もかりの室をはきだし、四方に跡札をはる（青森県）。棺が出た後、縄帯を締めて藁で束ねた箒で掃く（岩手県）。死者のいた部屋に石臼をころがす（佐渡）。籠を座敷に転がす（栃木県）。湯灌の水を入れた桶に、死人の布団をほどいた鎌を入れて垂木から落し川に流す（大阪府）。塩または大麦をまく（熊本県）。これらは婚姻儀礼と共通している。

願もどし

出棺のとき、一升桝に塩包の紙と白扇を「立願解」と声高に唱えて屋根に投げ上げる（佐渡）。死者の生前の立願を切る儀礼である。

三回廻すこと

出棺に先立ち棺を担いでカドを三回廻り、村のムソバの台に棺を据えるとき三回廻る（岡山県）。寺についたとき境内の中心を三度廻る（愛媛県）。墓場近くの、字（シマ）にれを告げる場所で棺を三回廻して白米を撒く（喜界島）。墓の地蔵様の前で三回廻る（奈

良県）。墓穴のまわりを左周りに三回廻る（鹿児島県）。三回廻りの場所は鉦や鐘が鳴らされる場・仮門と重なっている。僧の引導の前が多い。

葬　列

先頭に天蓋などを捧げた人夫、引導僧、牌をのせた小卓、喪主、近親の家族と親 の男性、棺、家の女性、一会葬者、末尾に鉦を叩く念仏者という順で葬列を組む（沖縄本島）。

葬列の装

男子は紋付羽織に袴、女子は白無垢の白装束、ともに白足袋に草履、額に三角にたたんだ白紙をつける（千葉県）。血縁の女性はイミ島田に結び白衣、男性は白衣の上下と素足に白緒のワラ草履。会葬者の女性は丸髷に白の角かくし、男性は肩衣（愛知県）。男の身内は白の上下にあみがさと藁草履、女は白装束でナキシマダにかつぎか舟ぼうしをかぶる（香川県）。女は白衣で帯は前結び、顔に綿帽子をかぶる（長崎県）。主要人物は蓑を着る（秋田県雄勝郡）。野辺送りの会葬者全員が白い手拭を頭にかぶる（高知県香美郡

物部村）。白い着物は死人には白しか見えないといわれ、かぶりものは死者の穢れを負うと太陽の下を歩けなくなるからといわれる。

埋　葬

掘土全部を盛土し、三本の木を交叉して荒縄で結び、その上に鎌をかける。七日目まで毎夕墓前で火を焚く（岩手県）。目籠を伏せ真中に杖棒を立てる。土の上に石をのせ、北隅に鎌の先を北に向けて柄を土に刺す（静岡県）。墓に墓標を立て小屋で覆い、四本竹を立てて縄を張り花木を生け水菓を供える（高知県）。墓穴に松明を一つ投げ入れ、棺を西向きに入れ、残りの松明と四角い灯篭を入れて鍬で土をかぶせる（宮崎県）。埋葬後松明に火をつけ盛土を左廻しに三廻り半なでる（熊本県）。棺を穴に入れ、傘をさして死者の姿勢や着物を直し、蓋を締めその上に小石を三個置く（喜界島）。石や刃物は彼岸と此岸を分けるといわれ、煙は死者の魂を天に送るといわれる。

草履捨て

帰途は往きと道を変え、草履も片方の鼻緒を切る（静岡県）。戻りには提灯を消し、草履を脱ぎ捨ててくる（熊本県）。白衣は寺で脱ぎ捨て、かつぎは顔ではなく肩にかけ、草履は墓の出口で捨てる（青森県）。婚礼儀礼でも同じことをする。

祓　浄

会葬者は遺族の家の前で藁火をまたぎ、塩と水で手を清め、仏壇に一礼してから自宅に帰る。自家では灰か塩をまき、それを踏んでから家に入る（青森県）。会葬者は他家へ立ち寄らず、復路を変えて自宅へ帰り、入口敷居の前で浪の花をまいてもらってから家に入る（和歌山県）。牌持荷役人は一つの戸口から入り外の戸口へ左廻りに三度廻る（廻り戸口）。その間に盥に片足を入れ、その中の塩をつまみ食い、コマアシを跨いでる（徳島県）。

服　喪

四十九日髭を剃らない（青森県）。喪があけるまで祭りや掃除をしない（兵庫県）。親

子兄弟が死んだ場合は四十九日までは他人と飲食をしない（福岡県）。服喪期間中の外出には笠をかぶる。忌明けには海水を浴び塩をなめる（鹿児島県）。四十九日まで毎朝男は編み笠、女はボーシで墓参りする（広島県）。道中、男は傘をすぼめ、女は風呂敷をかぶる（八重山列島）。ホンイミの四十九日は外出時、テントウオソレという六尺の晒木綿をかぶる（伊豆八丈島）。

何故、これほどまでに細かい儀礼が行われたのであろうか？

生死は連続するひとつのものとされていたが、それぞれは異界であり、人がどちらに置するかは重大であった。そして、好ましい生命の循環にとって生死のケジメが決定的に重要であったものと思われる。

10　村掟（ムラオキテ）

村掟は村落共同体の生活規範である。多分、縄文時代から慣習法としてあったものと思われるが、成文規約として残っているものは鎌倉時代あたりからである。地域的には惣の結合によって村落形成が進んだ畿内（山城・大和・河内・和泉・摂津）地方に早くからみられる。

名称は地域によってさまざまで、定条々事・定おきて事・惣庄置文・惣庄掟・地下掟・村定・村極・村掟・申合・村中取締一札・条目・法度・覚・議定・協約・連判状などと呼ばれた。

どんな内容が決められていたかというと、当初は衆議文言が多かった。つまり、皆で集まって決めた約束事である。村の寄り合いに出席する義務や申し合わせを守る義務、森林窃盗や作物窃盗などの農耕秩序、検地について要求を貫徹するための逃散の誓いなども含まれていた。さらに時代が進み幕藩期になると、村寄合・村役人・勧農・年貢勘定・倹約など領主法の遵奉がうたわれ、入会や山分けなどの土地関係、共同作業、風紀習俗、社会秩序維持など生活全 に及んでいる。

特に村の共同作業は重視されていた。労力提供という一種の義務で、村人足・村夫役・義務人足・村仕事・村普請・出役・ムラモヤイなどと呼ばれた。これには全戸から一人宛の一斉出役（総人足・総出人足）と、特定の仲間仕事などに必要人数が出る輪番出役（廻り人足）とがあった。一斉出役作業には、用水路・用水池の補修・水揚げ・水落し・渇水期の番水・分水制による水番・村山（共有山）の管理運用などがあった。ほかに火災・山火事・水害・高潮・風害などの災害時の対策なども一斉出動の対象だった。輪番出役には、臨時の道普請・葬儀の埋葬人足・外来者の接待のための宿番・菜（食料）番、さらには村の伝達業務を行う散使・小使も月や日の単であった。

村掟の中には複数の村々にまたがる組合村法もあった。例えば、越中国婦負郡八町村など四十ニヶ村の用水規定、信濃国伊那郡宮田村など三ヶ村の入会規定、山城国葛郡太秦村など十六ヶ村の盗賊・出火に関する割符定書などである。

村掟に違反すると罰が科せられた。俗に村八分などという。この呼称にもいろいろあ

る。村ハジキ・村ハズシ・村ハブキ・村バネ・村拒絶・村ヲ除ク・附合セズ・惣トシテハズス・イッポンモノニスル・ヤカンメシ・ベツナベカブラセル・七分ニスル・太鼓タタカレル・村笠キセルなどである。ほかにも村の内部構造の名を使った組外シ・株附合ハズシ・講バネ・若ハチブなどともいわれた。

この罰は共同体の秩序を維持するための絶交という制裁であった。罰の対象となった主なものは村落共同生活全 の規約違反、共同作業の懈怠、村民の反感を買う異常で不逞な生活態度であった。絶交によって村内の生活の共同関係を遮断して、苦痛を与えながら改悛をはかった。村八分というのは生活全体を十分として、火事と葬儀だけは残して他の共同関係を拒否するところからきた呼び名である。日常生活の絶交は勿論であるが、隣地で鐘を連打したり、青竹で門口を結いめぐらしたり、大声で威嚇したりする迫害も行われた。諸講や諸参会の停止、惣山への立ち入り禁止なども当然であった。その苦痛は並大抵のものではなかった。

このような共同の絶交行為は殆どが村民全体が一致して行った。追放ではなく村八分は村内にとどまることを許された罰であり、その究極の狙いは改悛にあった。仲介人に依頼してとりなしを願い出で、改悛が認められれば、陳謝や謝り酒の差出などという一定の手続きによって復帰が許された。これをコトワリヲイレル・ホノキニスル・アヤマリサセルなどといい、振る舞い酒をコトワリ酒・アヤマリ酒と呼んだ。とりわけ、村八分の多くは共同体秩序の撹乱行為であったからそれが維持できるならもはや問題はなかったわけである。

共同体における自治的な制裁には、村八分という除名絶交のほか、追放、財物没収（過料）、陳謝があった。追放は最も厳しいもので、村外に追放して共同生活から除去した。村八分は最も一 的で、最も自治的なものであった。過料はかなり新しく金銭や米・酒・油などを村に納めさせるもので、相当罰をはっきりさせるため成文化されていた。陳謝は最も軽いもので、公の席に仲人同道で詫び状を差し出し陳謝した。

今日報道される村八分は利権絡みや選挙などの対立関係で行われる差 や嫌がらせであって、先人の知恵としての村掟や村八分とは無縁のものである。

11 ユイ

ユイは結合という意味の古語である。元々は何かを共同ですることだった。恐らく人間が集団で生活を始めた時からひとりではできないことを一緒にしたのがユイだったと思われる。縄文時代の狩猟はユイそのものだったろうし、家を建てたり、巨大な木柱を立てたり、集落を形成し維持するさまざまな行為もユイだったに違いない。

最初に記録に現れるユイは家と家との共同関係であった。ユイは本家と末家（分家）、親分と子分、親類同士、組や講などにおける広汎な生活上の共同関係を総称していた。葬式や山野への入会や水利組合などそれは多岐に及んでいた。ユイデスル、ユイニスル、ユイヲヤトウ、ユイニヤトウなどという言葉が残っている。

後世になって農業上の共同作業がユイと呼ばれるようになった。しかし、それでも農閑期に風呂や温泉であんまをし合うことを「ユイアンマ」などといい、広汎な共同作業という影は残っていた。

農作業のユイでは、田打ち、代かき、田植え、稲の収穫、畑作などが行われた。代かきには馬が使われたが、馬の場合には人間の何人分というように計算していたようである。労力について貸し借りの意識があったようで、ユイヲカスとか、ユイヲカエスという言葉が残っている。

農作業のユイには二つある。一つ目は、小作農や自作農同士が三〜五軒で行うユイで、これは等 の労働交換である。二つ目は、大地主がその末家や出入人の労力を使うユイである。俗に手伝いとか奉仕と言われたが、大地主から食事を与えられたり、藁・米などをもらったり、生活上の庇護を受けるなどの反対給付もあった。賃銀労働ではなかったが無償というわけでもなかったわけである。大地主に手伝労力を出すことをスケといい、大地主が行う反対給付をスケガエシと言っていた。

末家や出入人は自分の小農経営をしながら地主に従属し、労役を出していた。それは日常的な農作業ばかりでなく家事も含まれていた。このように地主が労力を徴発し、末家や出入人が地主に労働奉仕することを地頭役とかヤトイと言った。これに対して臨時的な冠婚葬祭や屋根葺などは相互労働であった。地主からの現物の分与や貸与が行われ、これはスケとかテマと呼ばれていた。

ユイは、それがどんなかたちであれ地域社会における相互扶助である。その根底には

人間は一人では生活できないという認識があったものと思われる。ユイは今でも農山村には残っている。

（「家・親族の生活文化」　福田アジオ・塚本学編　吉川弘文館　参照）

12　食の禁忌と儀礼

日本では古代より、一緒に食べることが、ある時空や社会的集団に帰属することを意味していた。

道で食べる

道で食べることは穢れた行為である（今昔物語）。

同じ食器で食べる

社会的な身分や帰属集団の違う者が同じ食器で食べることは穢れた行為である（今昔物語）。

穢れた場所で食べる

穢れた場所で食べた者は穢れる。

産婦禁忌

産婦は 室にこもり、調理の火や食事も家人と にする。出産後、祓浄をし、家人との共食によって日常へ戻る。出産直後の産飯（高盛飯）は赤子が神の世界から人間界へ移るという意味がある。

葬送儀礼

死水や枕飯は死者がこの世から切れてあの世へ移ることを示す。湯灌や出棺の前に近親者が飲食をするのは死者のあの世への移行と並行している。また、出棺の折に死者の使っていた茶碗を割るのは、死者がもうこの世には属していないことを示すものである。

婚姻儀礼

娘が実家から出る前に水盃を交わし、家を出るときに茶碗を割るのは、娘を実家から切る儀礼である。嫁が婚家に入るときにはまず姑と、次いで夫との盃事があり、宴会では吸い物が出るたびに衣装を替え、高盛飯を食べ、ようやく婚家に帰属する。

宮参り

神に飲食物を供え、宮参りの帰りに近所の子供たちと共食を行うことによって赤子は人間界に帰属する。

成巫儀礼

巫女になるには穀・塩・肉・火を絶ち、先輩の巫女たちとの共食を経なければならない。

統治儀礼

食べることは国の占有儀礼であった。国土を食べるということが国土の統治を意味していた。神や天皇に食事を奉るとか、神や天皇が食事をするという意味は、土地の政治的・経済的支配だけでなく、その土地が神や天皇に属していることを示していた。

13　川がたり

野村春松著「四万十川がたり」（山と渓谷社）には、今でも引き継がれている川と人のつきあい方がしるされている。そのいくつかを抜き出してみよう。

○自然から糧を得る生活がいい。自分の職業だけしかやらんようではいかん。勤め

から戻ったらうちの仕事をする。自然からもらったものを丁寧に加減して食べるのが一番。

○広葉樹をどんどん伐って針葉樹に植え替えたために山の保水力がなくなった。土を流れないように止めておく力も弱くなった。

○人を使うなら使われてみろ。楽は苦のため、苦は楽のため。ひとつのことを辛抱して身につけたら自信もつく。辛抱して目標を実現できることを体で覚えたら、何やってもダメかもしれんということを考えなくなる。

○川は曲がるからきれいになる。川が蛇行するとバラスができる。バラスはこまかい石の集まりだから、この中を水が るると物凄い圧力がかかる。水がきれいになって出てくる。

○水はあふれるもの。大水が出るということは自然には必要なこと。堤防が切れたらおしまいとどきどきすることはあって当たり前。技術で万全にしたから大丈夫と思うからいけない。川のそばで、自然の中に暮らしているのだから「沢の水が止まったら逃げろ」というような知恵を持てばいい。

○人間も鮎も世間にもまれるほど精神も体も丈夫になる。もまれた鮎ほどうまいように、世間にもまれた子ほど魅力のある人間になる。若いときは強い人間、優しい人間になるために世間にもまれることが必要な時期。

○川岸を見てたら漁期がわかる。自然をよく見てその声を聞く。「イタドリの花が咲くとツガニが下がる」「イタドリが咲いたら誰でもアメゴが釣れる」。

○川はダムや護岸工事など一度いじってこわしてしまったら取り返しがつかん。ダムや堰にはゴミがたまるし、ゴミがたまるとメタンガスが発生する。ヘドロもたまる。水にはアオコもたまる。

○僻村塾、地元の宝は地元を離れた人や遠くから見る人の方がよくわかる。この宝の意味を都会の人から教えてもらい、みんなの財産として一緒に学ぶ集まりが僻村塾である。僻地にある心の原点を見直す試みである。

○自然に沿うて生きる。しかし、それだけではいけない。自然をよく見て研究して効率よくやる知恵のために頑張ることが大切。頑張りが当たり前のものと思えば辛いというより楽しい。

14　二十四節気

旧暦には二十四節気がある。太陽の動く黄経を二十四等分したもので、太陽暦の考え方である。立春、雨水、啓蟄、春分、清明、穀雨、立夏、小満、芒種、夏至、小暑、大暑、立秋、処暑、白露、秋分、寒露、霜降、立冬、小雪、大雪、冬至、小寒、大寒がそれである。

この内、現代人にも意識されて残っているのは春分、夏至、秋分、冬至くらいだろう。縄文人もこれで季節と生活をかみ合わせていた。

春分＝黄経〇度。三月二一日頃。昼と夜の長さがほぼ等しくなる日。太陽が南から北に向って赤道を過する点。春分を過ぎると昼の時間が長くなっていく。

夏至＝黄経九〇度。六月二二日頃。北半球で昼が最も長く、夜が最も短い日。

秋分＝黄経一八〇度。九月二三日頃。昼と夜の長さがほぼ等しい日。太陽が北から

南に向って赤道を 過する点。
冬至＝黄経二七〇度。十二月二二日頃。北半球で昼が一番短く、夜が最も長い日。

春夏秋冬の季節はこの四つでわかる。そして、季節が最も重要なのは食べ物の旬である。旬とは魚や野菜・物が完熟して最もおいしい時である。人間の体はこの旬に適応している。体温が低い時にはそれを上げるものが旬を迎え、体温が高い時にはそれを下げるものが旬になる。

春に旬を迎えるものは、白魚、しじみ、あさり、はまぐり、桜鯛、うど、なずな、あさつき、セロリ、菜の花、高菜、パセリ、サラダ菜、ふき、つくし、わらび、にら、山椒、ねぎ、キャベツ、レタス、アスパラガス、つまみ菜、さやえんどう、ぜんまい、グリーンピース、ネーブル、三宝柑、夏みかんなどである。

夏が旬になるものには、鮎、初鰹、どじょう、うなぎ、筍、そら豆、いちご、瓜、なす、ところてん、にんにく、じゃがいも、いんげん、らっきょう、梅の実、シソ、びわ、さくらんぼ、トマト、ピーマン、枝豆、オクラ、まくわうり、桃、ラディシュ、きゅうり、とうがん、ごぼう、ふだんそう、はっさく、白桃、などがある。

秋の旬は、秋刀魚、西瓜、さつま芋、初茸、唐辛子、松茸、秋茄子、米、栗、かぼちゃ、柿、とうもろこし、生姜、ぶどう、梨、グレープフルーツ、パイナップル、しいたけ、白菜、蓮根、マッシュルーム、落花生、くるみ、ぎんなん、大根、山芋、ほうれん草、ねぎ、野沢菜、えのきたけ、カリフラワーなどである。

冬が旬の食べ物は、鮭、ふぐ、なまこ、鯨、葱、大根、ごぼう、人参、さつまいも、じゃがいも、里芋、蕪、白菜、くわい、みつば、ゆず、紀州みかん、ざぼん、小松菜、やつがしら、えび芋、りんご、きんかん、だいだい、ブロッコリー、芽キャベツ、わけぎ、京菜、からし菜、春菊、ふきのとう、クレソンなどである。

旬のものを食べるのが体に最も合っている。今でも、農山村や漁村のお年寄りは旬のものを食べている。長寿といわれる地域がすべて農山漁村なのはこのあたりからきているのだろう。

まつりに残る縄文

1　まつり

太古の時代、まつりは神に対する畏怖と忠誠、恵みに対する願いと感謝を目的として始まった。

最初は恵みをもたらすすべてのものを神と考えまつりの対象とした。だから、草木であり、魚介類であり、鹿などの動物がまつりの対象だった。さらに、それらを採取する山や川や海、貯蔵や加工や調理に便をもたらす水や火や土器なども神としてまつりの対象となった。ところが、やがてそれらの個々のものの背景にもっと大きな目にみえない何かが働いていることに気づき、その存在を意識するようになると、それをも神と考えた。

最古のまつりの原型は、まず、目に見えない大いなる神を呼ぶこと、大木や岩などが

神に降りてきてもらう依り代とされた。次に、神に食べ物、つまり、神饌を供え、神聖な宝物を供えること。更に、祈りが行われ、そして舞楽を捧げる。最後に、直会、つまり、神と人が神饌を共食する。

まつりは、神から恵みをいただくために、人が自らに掟を課して律し、神をもてなし、神の意を伺い、神の心のままに奉仕するものであった。

まつりは、神と人の間を釣り合わせることである。間釣り合い、間釣り合わせ、これがまつりである。神と人との関係を安定した状態で調和させること、ここにまつりの本質がある。

人は神に生かされているちっぽけな存在である。己ひとりでは生きていけない。神の恵みをいただく以外に生きていく道はない。太古の人々は神を自然の全体系として理解していた。まつりはその神の恵みをいただくために不可欠のものであった。

まつりは、すべてに優先して行われた。神事を司るのが大王で、政治を司るのが大臣といわれ、古代天皇制では長男が神祭りを行い、次男が政治を受け持った。神を司る者が支配者だった。政治は神の意のままに人の社会を運営することだったのである。

現代に継承されているまつりはその原型をすべてではなくとも残している。しかし、最も本質的なことは自然に沿う生き方がすべてのはじまりであるということである。

2　琉球の祭祀

鹿児島と台湾の間に浮かぶ島々を琉球という。奄美・沖縄・宮古・八重山などの群島が連なる。これらの島々には古い祭祀が残っている。とりわけ久高島や宮古島狩俣は典型的な存在である。比嘉康雄著「日本人の魂の原郷沖縄久高島」（集英社）を要約しなが

らご紹介したい。

久高島の祭祀の特徴は、まず第一に、祭祀そのものを じて島人の宇宙観や自然観や文化が伝承されているということ。文字で書かれているわけでもなく、語り継ぐというわけでもなく、祭祀そのものが精神の拠り所として続けられてきた。島人の精神の拠り所は次のような魂についての認識にある。

人は誕生とともに魂を体内に入れ生きる力にする。魂は体が不調な時や悪性の魂は寝ている間に肉体から離脱して他人に悪さをすることがある。このような生魂（イチマブイ）は魂を呼び戻す儀礼をすれば元の肉体におさまる。

人が死 と肉体を抜け出す死魂（ヒーマブイ）は守護霊にも悪霊にもなる。守護霊は善霊で秩序霊といわれ、家・血族・島のそれぞれのレベルで守護を祈る祭祀がある。悪霊は混沌霊といわれ祟りをもたらす。祟りを取り除く儀式がある。

久高の人々は病気や事故やさまざまな困難の原因を、生魂の悪さや祟り（イチジャマ）と考え、死魂の祟りと考えている。

久高島の祭祀のもうひとつの特徴は、司祭者が女性だということ。祭祀の主体が女性だということは母性原理の文化を意味する。縄文時代にみるように魚介類採取の生活では男性よりも女性の能力が発揮される母系社会である。生む・育てる・守るという母性が女性優 の根拠になっている。子どもは母親に属し、男親と子どもとの関係は社会的に制度化されていない。大地母神、母性が愛護を根拠に守護力を持った。この守護力は母親をはさんで、祖母から孫娘へと継承される。そして、祖母霊が現世に働くのは一代限りで、守護力は三代ごとに完結し、一代重なりながら次の三代へと継承される。

久高島の祭祀の体系には、秩序霊に守護を祈るものと、混沌霊の祟りを取り除くものとがある。

秩序霊に守護を祈る祭祀は、家と血族と島の三つのレベルがある。家レベルの祭祀はイザイホーという神女（タマガエー）の就任儀礼を終えた神女がとりしきる。血族レベルの祭祀は始祖家の神職者であるノロや補助者であるウメーギが担当する。そして島レ

ベルの祭祀は一年に二十七回あるが、クニガミやヤジクといわれる神職者によって行われる。

混沌霊の祟りを取り除く祭祀はティンユタという巫女が受け持つ。

イザイホーという十二年ごとの午年、旧暦十一月の十五日の満月の日から十八日までの四日間にわたって行われる神女の就任式がある。島生まれの三十一歳から四十一歳の女性は全員神女になり七十歳までつとめなければならない。

○一ヶ月前の午の日、始祖家の神々と、祖母霊の鎮まる森・御嶽の守護霊に、イザイホーを行う報告の儀式が行われる。

○一日目、祖母霊の香炉の継承式と七ツ橋渡り。香炉は祖母霊の拠り所であり、これをイザイホーを行う者が引き受ける。新入りの者が七ツ橋を渡って祖母霊のいる七ツ屋に入る。

○二日目、洗い髪たれ遊び。他界空間である七ツ屋に入り祖母霊と一夜を過した新

入りが、再びこの世に登場して舞う。

○三日目、朱付（シュリイキ）、花さしあしびともいう。祖母霊と合体した新入りが守護力を備えた成女（ナンチュ）として一人前の神女の認証を受ける。

○四日目、ニラーハラー（あの世＝太陽の出るところ）を遥拝しイザイホーの終了を報告する。アリクヤーという神船で参列していたニラーハラーの神々を送る。ナンチュが自宅で兄と対して盃を交わす家まわり。イザイホーの終了を太陽と月の大神と始祖に報告し、神酒桶の周りを舞う桶まわり。

久高島では子どもが生まれると島の祭祀場で神職者による名付（ナーリィキ）が行われるが、そのときの願い詞（コトバ）で「あまりえらくなってはいけない。普であってほしい。」という。久高島では、女は神人（カミンチュ）、男は海人（ウミンチュ）の人生が決まっており、それからはみ出すことは不幸と思われている。

女は生後、旧暦の三月・六月・八月のフボー御嶽参りに参列する。旧暦八月十一日の十五歳以下全員のフボー御嶽参り。十一歳の旧暦六月二十四日の健康願いで腰巻を着用。

そして、イザイホーで神女となり、家族の守護を担い、ノロの祭祀に参列する。七十歳になると神女の引退式がある。

男は祖父の名をつけられる。生後三ヶ月で船漕ぎの儀式、十三歳になると漁労の実地訓練。十五歳になるとンナグナーと呼ばれ正人になるための準備訓練を受ける。十六歳で神職者に盃を捧げ一人前の正人（成人）になる。祭祀の際に神々に供える飲食物や神饌の供出が義務づけられる。五十歳になると現役を引退し祭祀の雑役をする村頭（ムラガシラ）に就任する。ここではじめてノロの祭祀に接する。五十一歳になると大主として承認され、ノロの祭祀にもオブザーバーとして参列する。六十代になると漁労祭祀を司るソールイガイナシーに就任する。七十歳で正人を引退する。

3　ねぶた祭り

毎年八月一日から七日まで青森で「ねぶた祭り」が行われる。同じような祭りは東北

地方に多く、弘前では「ねぷた祭り」といい、山形や福島では「ネムリ流し」といい、秋田では「ネブリ流し」という。さらに、長野では「おんねぶり」、埼玉では「ネブタ流し」といわれている。

七夕の行事で、飾りものを作って、これに穢れを移し、村々を練り歩いたあとで火をつけて燃やし、川や海に流す。「ねぶた」というのは睡魔のことで、穢れを祓うほかに、秋の労働の妨げになる夏の睡魔を追い払う意味もこめられている。ネムリ流しというのは、ネムの小枝や大豆の葉や笹で目をこすって川に流すと眠気が覚めるという言い伝えからきているようである。夏は魂が衰えるのでバテるし、昼眠くなる。そうすると魂は浮遊しやすくなる。眠気は封じなければならない。

ねぶた祭りでは先ず、飾りものが作られる。青森では車の上に大きな張りぼて人形を組み立て、それに武者絵などを描く。弘前では紙で大きな扇を作り、これに武者絵などを描く。この絵は盆に帰ってくる霊で、悲惨なことや酷いことを追い払うために、ドラ

マの絶頂のように突き出して見せるものであろう。

この飾り物が村々を練り歩く。八月一日から六日まで練り歩く。最前列にバケトと呼ばれる人々がいて先導する。男性が長襦袢で女装する例が最も多い。バケトは多分この世の人間なのであろう。この後にハネトが続く。ハネトは多分あの世からきた死霊なのであろう。丸い輪を描きながら大地を蹴って飛び上がる踊りである。人間が死霊と一緒に踊る。昔の盆踊りには笠をかぶったり仮をつけて異形のものが出てきたが、これがまさに霊だった。死者を慰め、死者と生者が接点を持つ。太鼓や笛や手振り鉦の鳴り物が入り、「ラッセラー、ラッセラー」と掛け声を発し、「ねぶた流れろ、豆の葉留まれ、いやいやいやよ」と囃しながら練り歩く。

八月七日になると飾り物を燃やして海に流す。霊送りである。死霊をあの世へ送るわけである。こうしてみると生と死を結ぶものが火なのである。ねぶた祭りは水祭りといわれるが、実は火祭りでもある。現代のねぶた祭りは飾り物の竹が針金に替わり、灯明が電気に替わったため火で燃やすことがなくなっているが、燃やして水に流すのが原型である。最期に焼くのが火流しの行事の本質である。だから火祭りなのである。

天皇が死 と宮を移すが、これもかつては宮を焼いた。あの世へいった天皇に宮を届けなければならないからである。

津軽半島の黒石で行われている大川原の火流しは、茅と藁で船を作り供え物をあげてまわりで踊り、最期に火をつけて川へ流す。

夏泊半島のウラダでも人形送りが行われており、茅と藁で男女一対の人形を作り、練り歩いた後村はずれで男女の人形を合わせてお祈りをし、人形に火をつけて海に流す。

五所川原地方の虫送りも茅と藁で虫を作り、担いで練り歩き、村はずれで喧嘩をさせる。

人は死 と山へ帰る。山へ霊を送るのが送り火である。霊は盆や彼岸にはこの世へ帰ってくる。それを迎えるのが迎え火である。人は死に変わり、生まれ変わる。これが縄文人の信仰であった。子供の間引きが頻繁に行われた時代、人々は子供を殺すとは言わず、「ヒバリになる」「スズメになる」「山に帰る」と言った。ねぶた祭りにはこの大らかな信

仰がそっくり残っている。

4　那智の火祭り

和歌山県熊野郡那智神社で毎年七月十四日に行われる火祭りで、扇祭りともいわれる。十二基の扇神輿が熊野那智大社から飛龍神社へ渡御するもので、この間を一本十貫（六十キロ）の大松明を十二本燃やしながら警護し清める。

十二基の扇神輿は神武天皇が滝元の飛龍神社に祀ったとされる十二社権現である。これが仁徳天皇の時代に那智山中腹の熊野那智大社に遷されるわけであるが、火祭りはこの十二の神々がご神体である那智の滝へ里帰りするというわけである。

熊野那智大社では、早朝十二の神輿が緋扇の花で飾られる。次いで大和舞、さらに那智田楽が奉納されて、午後、神輿は飛龍神社へ向けて出立する。一方、十二の松明は神

輿を迎えるべく飛龍神社を出立する。そして、途中で神輿と松明が邂逅し、松明が神輿を導いて飛龍神社へ渡御する。

太古の時代、火は大いなる破壊と創造をもたらした。すべてを焼き尽くしながらその後に新しい生命を芽吹かせた。野焼きや焼き畑を考えればこのことはよくわかる。火祭りは火の持つ破壊と創造に対する畏敬なのであろう。

また、火は邪悪や穢れを焼き払う。全国のサイノカミ（道祖神）や長野県松本地方のサンクロウなどで行われる現代のドント焼きの風習は正月の松飾や神符を焼納し、厄疫を祓うものである。

そして、火は神を招き祖霊を呼ぶ。冬に行われる火祭りは冬至の頃最も弱くなっている太陽に火を焚いて力をつけるために行われる。神社で焚き火を燃やす京都の御火焚、堅い木に堅い棒を擦って火を起こす埼 県金銑神社の火銑神事、大晦日に新しい銑火を参拝者に配りその火で雑煮をつくる京都の八坂神社や平野神社の銑火祭りなどはこの例である。

那智の火祭りは水を象徴する大滝が、火を象徴する大松明を遣いとして、扇に身をやつされた神々を迎えるという神事である。水と火と人が一体となる祭りである。ここには縄文人の祭りが色濃く残っている。

元々祭りは神を祭ることであり、神をもてなし、神の意を問い、神の心のままに奉仕するものである。神と人の間を釣り合わせることである。間釣り合い、間釣り合せが祭りである。神に降臨してもらい、感謝を捧げ、その心を伺って神と人が交流し交歓して調和をはかるのが祭りなのである。

5　諏訪御柱

諏訪大社は七年ごとの申・寅年に御宝殿の造替とともに、上社と下社で御柱祭を行っている。「みはしらさい」とも、「おんばしら」とも呼ばれる。

この祭りは、上社は八ヶ岳西麓の御子屋山から、下社は霧ヶ峰の麓の東俣御料林から

予め見立てられた樅の用木を氏子中が三里から五里の道を曳き出し、それぞれの社殿の四隅に建てる。上社では本宮と前宮に各四本合計八本、下社では春宮と秋宮に各四本合計八本立てる。柱の長さは決まっていて、一の柱が五丈五尺（約十八メートル強）、二・三・四の柱は五尺（一メートル六十五センチ）ずつ短い。直径三尺（約一メートル）内外の大木である。

上社の場合、用木は予備を入れて九本を、祭りの年に次回の樅の用木を予定し、前々年の五月に仮見立てをし、前年に本見立てを行う。本見立てされた用木には注連縄を張り、「本宮一之御柱」などと標示した木札を打ち、神器である薙鎌を打っておく。下社ではこの薙鎌は打たない。

祭りのその年になると、正月の申または寅の日に山の神を祭り無事を祈願する。三月には火入式をし、御子屋明神祭を行って用木を伐採する。四月の申または寅の日に御柱山出しがある。御柱は、神林から綱置場を経て御旅所寝之神社へ入り、ここで一泊する。翌日、崖を曳き落とす木落しが行われ、宮川の水で清めて渡す川渡しの行事を終えて御

柱屋敷へおさまり、本曳祭（里曳祭ともいう）の五月までここに約一ヶ月奉安される。

里曳祭は五月初寅・申の日、御柱屋敷から本宮・前宮に御柱行列が行われる。お船という諏訪明神の神輿（長さ五メートル・幅三メートル・青竹百本で組まれた舟型）が先導し、これに本宮一之御柱以下が次ぐ。さらに、騎馬行列、曳子の長持行列も加わる。

本宮境内に入ると、御柱は先端を三角錐に切り落とす冠落しを行い、所定の置に曳建られる。曳建られる御柱に跨った若者の妙技も披露される。本宮に次いで前宮の曳建が終わると宮司以下の祭員による御柱固祭が行われすべての行事が終了する。

下社でも上社とほぼ同じ行事が行われるが、山出しは上社の七日後となっている。木落しは下社の方が峻険で、百メートル余の断崖を数人の若者が御柱に乗って大音響とともに落下する。

里曳も上社の七日後に行われる。初日に春宮の曳建を行い、二日目に町内を曳きめぐった後秋宮の曳建が行われる。

諏訪地方では郡内の各社が御柱を建てる風習がある。これを小宮御柱といい、その年の秋頃まで続くという。御柱祭は諏訪一円の古例といえる。

6．早池峰の賦

羽田澄子監督の作品に岩手県北上山地の早池峰山の麓の集落に伝わる山伏神楽のドキュメンタリーがある。一九八二年の作品で、一八五分の長編である。

この集落には早池峰神社がある。神仏混交である。神は山の神（鳥などの をかぶった人が務める）、仏は権現（獅子舞のような木彫り）である。

毎年八月一日に祭りが行われる。近在から各家に祀られている権現が神社に集まる。まず、神殿で神楽が行われ、その後権現が神輿を先導してお旅所へ向う。お旅所では権現舞が奉納される。そして再び行列は神社へ戻る。神社では村人たちの奉納相撲が行われる。この祭りは人々が悪人にならないように舞う神楽である。

この祭りの神楽のほかに、まわり神楽とか、り神楽といわれるものがある。これは近

在の権現をまわる神楽である。いわゆる門付けである。今でも、観光や新築などの祝いごとで呼ばれていくという。年に五〇回は下らないそうだ。

神楽を舞う人々を神楽衆という。六百年続いているこの神楽、親から子へ丁寧に伝承されている。麓の集落は岳と大償と二つあって、この両方で綿々と受け継がれている。兄弟神楽といわれているが、一方が男神楽で、他方が女神楽とされている。

岳も、大償も、貧しい地域で、米はできなかった。稗や麦や豆が主食だった。だから年寄は六二歳になると捨てられた。姥捨て山である。十ヶ月もかかる南部葉という葉巻の葉を栽培しているが、今でも家族総出でかかって年に七〇万くらいにしかならない。品質が悪ければ年に十六万程度しか稼げない。

米を作ろうと自力で集落総出の労働を行い、四年目にやっと水路が引けた。それでも生活は苦しかった。

八月一日の祭りの神楽は集落の結束をはかり、一方で唯一の娯楽だったのであろう。だから一日中続く。そして、まわり神楽はまさに生活を維持するための門付けそのものだった。

神楽衆は必死で芸を磨いた。芸を磨かなければ生活がたちゆかなかった。まるで世襲制か、徒弟制度のように芸は今でも子々孫々に伝承されている。

体に残る縄文

1　心は腹にある

「腹」や「腸」という字は心を表している。太古から腹に精神が宿ると考えられていた証であろう。

例えば、心の中のことを「腹の中」「腹の虫」という。「腹一杯」には満腹のほかに、考えていることの全部という意味がある。「腹案」といえば心の中にある考えということになる。相手の心中を推し測るとき「腹を読む」「腹を探る」という。「腹に一物」といえば考えていることがわからないことをいう。心をわすことを「腹を割って話す」とか、「腹蔵なく」という。そして絶対的信頼関係を「腹心の友」などという。

精神が堕落するさまを「腸が腐る」という。

心構えを「腹積もり」とか「腹構え」「腹を括る」といい、決心が変わることを「腹変わり」という。

心がきたないことを「腹黒い」「腹汚い」という。

怒りは「腹が立つ」、我慢することは「腹に収める」になる。「腹癒せ」といえば怒りをまぎらわす他の行為をいう。

度胸や度を「腹が太い」「腹を据える」「腹ができている」といい、「腹芸」などともいう。

現代の生命科学の念では心が腹にあるとはいわないようである。この虚偽は恐ろしい。西原克成著「内臓が生み出す心」（ＮＨＫブックス）から腹に宿る心のありようを要約してみよう。

生命現象とは、「消化吸収した栄養と酸素を反応させ」、「エネルギーの渦をめぐらせながら」、「旧くなった細胞を新しくつくりかえ」、「老化を克服するシステム」である。

腸からの栄養と酸素の吸収によって新陳代謝が行われるが、これが欲求そのものである。「腸の消化・吸収の能力」と「好き・嫌い」が五欲の源である。五欲とは、財・名・色・食・睡である。心は五欲に発する感情であって、内臓から発する情動、胸と腹に心が宿っている。

「自己の本体」はまさに腸管の消化・吸収能力の好みにある。アイデンティティは腸管そのものに存在しているのである。

「腸の能力」が「心」である。腸に心が宿る故に、内臓を移植すると心まで変わってしまうのである。脳に心はないから脳細胞を移植しても人格や心に変化は起こらない。

腸が生きている限り、ヒトは生きている。だから、脳死はヒトの死ではない。脳死を前提とした臓器移植は殺人罪になる。

古来より腹に心があることは事実であった。武士の切腹は単なる自殺行為ではなく彼らが自己実現に失敗したときの身の処し方の作法であった。切腹は法的な儀式的な制度であった。魂が腹に宿るとする不動の信念に裏打ちされていた。

生命が宿ることを「孕む」といい、腹に宿る胎児を生命の魂の象徴として「勾」という神器がある。

2 切腹

切腹が初めて記録に表れたのは七一三年の「播磨国風土記」である。そこには、花浪の神の妻の淡海が夫を探し求めて適わず、腹をさいて沼に飛び込んで死に、その沼をハラサキヌマといい、その後沼にすむ鮒などの生き物には五臓がなかったという話が載っている。神様の話で、しかも女性が腹を切っている。それも、腹を切ったあとでハラワタをつかみ出して沼に飛び込んでいる。だから、その沼の生き物にはハラワタがないということになっている。

切腹は実は原始・古代の内臓占いに端を発するといわれる。それは内臓に人の誠意や本心が存在するという考え方によっている。人の真心は内臓に宿る故に、真心を相手に見せる手段として、腹を切り開いてハラワタをはみ出させた（「武士道」・新渡戸稲造著）。

占いにも、鹿の肩甲骨を焼くと現れる割れ目で占う太占や亀の甲羅を焼く亀トがあった。

縄文の渦状紋様は内臓の抽象であるとか、縄文人が神聖視した蛇の這う姿は腹部臓器そのものであるいう見方もある。また、銅鐸の狩猟絵画にある鹿の腹部の渦巻紋は生命線であるという評価もある。

縄文人には自殺はなかったと思うが、心が内臓に宿るという認識があり、その内臓を開いて心を見せるという意識があったのではないかと思われる。その名残と思われる史実もある。例えば、旧南部藩領に割腹してハラワタを引き出してみせる方法があった。また、八戸藩の津村家の刑罰の掟として、一族家内・奉公人・中間・下女に至るまで、切腹してハラワタを引き出し介錯を受けることに決まっており、ハラワタを引き出すまでは介錯はしないことになっていた。ハラワタを引き出した者には罪を取り消し、津村家の一員として埋葬供養し、遺族には見舞金が出された（「日本人はなぜ切腹するか」・千葉徳爾著）。こうしてみると、切腹は武士に固有のものではなく、太古からあり、百姓

にも女性にもあった。

「義経記」によれば、義経は最期の時をむかえて「自害は如何ようにしたるをよきというらん」と問い、切腹を知らなかったという。源氏は佐藤四郎兵衛忠信に代表されるように切腹をしたが、平家は入水して切腹はしなかった。切腹が武士に定着するのは鎌倉時代である。それは、刑罰としてであり、無念腹であり、蔭腹（腹を切って主君を諫めること）であり、詰腹（周囲から無理やり切腹させられること）であった。当初はハラワタをつかみ出す風習は残っていたが、苦痛の激しさにくらべて、切腹では絶命に至らないことが多く、次第になくなり介錯が採用されていった（「切腹の歴史」・大隅三好著）。

腹黒い・腹を読む・腹に一物ある・腹に収めるなどの言葉は考えや心中を表している。太っ腹・腹を据える・腹ができているなどという場合には度 や度胸のことである。腹が立つは心の不安定を示し、痛くもない腹を探られるといえば心を疑われるという意味である。腹を割って話す・腹蔵なく話すという表現は本心に触れている。そして腹を括る

といえば決意の表明になる。腹心の部下といえば信頼できる部下となり、こうして昔から腹に心があったことは真実である。

3　現代日本人の体に残る縄文人の痕跡

現代日本人の遺伝子は平均的に、七割が弥生系で、三割が縄文系だといわれている。地域的には、西日本が弥生系、東北・北海道・九州南部・沖縄が縄文系とされる。

現代日本人に残る縄文人の遺伝的痕跡を小田静夫監修「日本人の源流」から要約してみよう。

縄文系は身長が低い。一九一七年の日本人の平均身長は一五八センチであるが、縄文系地域では平均身長以上の人が五一％以下である。弥生系地域では平均身長以上の人が

六〇％以上になる。

縄文系は顔が短い。頭頂から顎までの長さが、縄文系地域では短い。弥生系地域になると顔が長い。

頭長幅示数、つまり、頭を真上から見たときの前後の長さと左右の長さの割合が、縄文地域では前後が長く左右が短い。逆に、弥生地域では前後が短く左右が長い。

指紋にも縄文人の遺伝子が残っている。指紋には、丸く渦を巻く渦状紋と、渦の下側の一ヶ所が途切れて左右へ流れる蹄状紋と、渦がなく中心が盛り上がった横縞の並ぶ弓状紋とがある。この内、渦状紋と蹄状紋には三叉といって横縞の中に渦があるため溝が三方に分岐する形状がある。十本の指に三叉がいくつあるかを指紋三叉示数という。縄文系地域の指紋三叉示数は低い。

手の平の手掌紋というのがあるが、朝鮮半島とつながりの濃いのは弥生系地域で、縄文系地域では最もつながりが薄い。

縄文系は福耳が多い。特に、奄美諸島や北海道に福耳が多い。弥生系地域へいくと福耳は少なくなる。

このように縄文人の身体的特徴は現代日本人に色濃く残っている。

種族に残る縄文

1　アイヌの自然観

藤村久和著「アイヌ、神々と生きる人々」（小学館）にはアイヌの古老からの伝承が丹念に記録されている。私はそれらに縄文人の自然観をみる思いがする。その抜粋・要約をご紹介しよう。

アイヌの人々はこの世に三種類の存在があると考えている。それは神と人間と人間が作ったモノである。この三者は互いに育みあい一体化している。人間は神とモノとのかかわりあいの中で人間としての役割を持つ。人間は先ずその役割を たさねばならない。一人一人の生き方はその次の問題である。だから、勝手に生まれて、勝手に生きて、勝手に好きなことをしていればいいというものではない。

神は人間が素手で立ち向かえない相手で、火・風・雨・雷・雪のような自然現象はす

べて神である。死人や魂も神である。大型の動物、蝮のように毒を持つ動物、蜘蛛のように特殊な能力を持つ動物も神である。巨木やトリカブトのような毒を持つ植物も神である。人間が作ったモノでも人間生活と切り離せない家なども神である。

神には人間からみて親しみやすい身近な神とそうでない神があるが、上下のランクはない。仲良くすること、手をつなぐこと、それぞれの能力を発揮する場所をつくること、それが神の世界でも人間の世界でも必要である。

神の役割は人間を守ることである。神には人間を守る義務がある。そしてその義務に対して人間からお礼を受ける権利がある。人間には神に守ってもらう権利があり、神にお礼をしなければならない義務がある。神と人間はそういう関係にある。

肝心なのは神と人間が仲良くなり、非常に深いつきあいをすることである。そうすれば人間も磐石だし、神も磐石になる。このことをアイヌ語で「カムイ・オカイ・クス・

アイヌ・ネヤッカ・オカイ・エアシカイ。アイヌ・オカイ・クス・カムイ・ネヤッカ・オカイ・エアシカイ・ルウェネ。」という。神がいらっしゃるから人間も無事に暮らしていることができる。人間が大勢いるから神も役目を推進するためにおわすことができる。

アイヌの人々は昔から自分を軸にするのではなく、多くの他者の中に自分を置く。多くの人たちの助けを借りて今の自分があると考える。アイヌの人々は腹八分の考え方をする。地や名誉・名声というのは自分から望んで得られるものではなく、多くの人々に支えられてはじめて現れる。

男性も女性も自分の系図をとても大事にする。男性は男系を十代以上も前まで覚えている。女性も同じである。系譜の最初、つまり、祖先神はそれぞれの家系で決まっている。天界におわす神があるとき人間界に降りたち、ある一人の女性をみそめ、その女性が子供を持つ。その子供の何十代もあとの子孫が自分であり、自分にとって祖先にあたるその神が祖先神なのである。祖先神を表す印として、男は家紋と神紋、女は下紐を持つ。

そして、結婚に際しては男女とも五代前まで直系を遡り、同じ名前が出てこないことを確かめる。それだけ男系、女系を大事にした。アイヌは男系、女系の両方を大事にする双系社会である。神祀りは男女協力して行われた。また、家は男が継ぐが、財産は男女それぞれが男系、女系へと継がれた。

アイヌの人々はいつも人の一生は何のためにあるのかという問いに対する答えを頭においている。それは辛いことや苦しいこと、それを乗り越えていくために人間は生きているというものである。災難や困難は自分への試練であると考えた。試練はより人間として大きく成長するためにあり、聖人になることを生涯の大目標においていた。より人間らしい人間になることを目標にしていたのである。

2　山家（サンカ）

山家と呼ばれた人々は、夫婦と子供という家族連れで、仮屋や天幕で野宿をしながら、春から秋にかけては川魚漁、冬は棕櫚箒・竹細工・箕づくり・説教節やタタキ（縁起物の語り）・門付芸（春駒）などを生業として農山村を回遊していた。彼らはそれぞれが自分たちの回遊路をもち、得意場を持っていた。

その出自は、先史時代の土蜘蛛や国栖などという先住民、室町時代の坂の者（河原者）、一八世紀末の天明・天保の大飢饉で耕地放棄や走りや逃散で山へ入った窮民という説がある。山家が、回遊型の技能集団であったこと、その名称の起源が中国地方であったこと、天明・天保の足掛け七年に及ぶ冷害大凶作の最大被害地が中国地方の農山村だったことなどを考え合わせると、餓死を逃れて山へ入った窮民という説が最も説得力がある。

サンカという呼称は外部からのもので、各地でさまざまに呼ばれていた。中国地方ではサンカ、四国ではサンガイ、九州ではミナオシカンジン、東海ではポン・オゲ、関東

ではミヅクリ・ミナオシなどといわれた。一八八〇年までは官側の報告書にも山家と出ているが、一八八五年以降に大衆小説の中で「山窩」という山にひそむ盗賊という意味の字が使われ曲解を呼ぶことになる。しかし、彼らは仲間内ではショケンシ（世間師）とか、ケンシと呼んでいた。また、後から仲間入りした者（乞食やライ病患者）をラコと呼んでいた。彼らが盗賊なら乞食やライ病患者を受け容れたりはしなかっただろう。神々しい魂の持ち主だったと思われる。

山家は一九五〇年代までは実在していた。彼らは自然に身を委ね、身ひとつで技を磨き、川と竹と芸能に秀でていた。毎年、同じ季節にほぼ同じ農山村を訪れ、自分たちの生産物をお得意先に販売し、彼らを心待ちにしていた農山村の人々の役に立っていた。村のはずれに野宿することを瀬降りとか野合とか野伏せというが、村人もそれを公認していた。技術と人柄が信頼されていたからであろう。

家船という漂海民と山家の間には不思議に共 点がある。定住していないのに家が呼び名になっている、家族単 、家族内分業、更に、明治維新後の定住政策では普 の町村では受入れられなかったことなどである。

3　家船（エブネ）

家船は外部からの呼び名で、内輪では船住居とか船所帯といった。瀬戸内海の漂海民である。家財道具一式を船に積み、船の上で寝起きして、漁で生計を立てていた。

その起源は、有史以前からの漂海民とも、中世の海賊の末裔ともいわれている。

彼らが信奉する神からみると、ワタツミ神の阿曇系・住吉神の住吉系は、中国江南あたりが出自に思えるし、宗像神の宗像系や大山祇神の隼人系は東南アジアが出自と考えられる。

それはさておき、家船の民は一九六〇年代までは現存していた。彼らは海とともにあり、神社や寺は陸に持っていたが、定住民ではなかった。支配者側からみると、全く掌握困難な存在だった。それ故、律令制の整備とともに陸上での定住を迫られた。一六六四年に宗門奉行がおかれ、一六七一年には宗旨人 帳制度ができて、家船の民は菩提寺の宗門改で管理されるようになった。

漁をするのは夫婦二人が基本だったが、数艘の集団を組んで漁をすることもあった。この仲間船は収穫や売上高を平等に分配する習慣をもっていた。

彼らは先祖代々から伝えられた技術や仲間内の情報交換によって漁場を選び効率のいい漁をしていた。特に、一本釣りの技術は優れていたという。大分県佐賀関の関サバの一本釣りは家船からの伝承といわれる。手繰網の小網漁の技術にも優れていた。女と子供が麻糸を編んで網すきをし、男が漁をして、獲れた小魚は翌朝女房がハンポウと呼ばれる桶を頭に乗せて売り歩いた。彼らの漁労技術が高度だったので、漁村の漁師も地先海へ家船が入ってきてもとがめだてはしなかった。むしろ、一本釣りや手繰網の技術を教わることが多かったようだ。

操船技術もかなり高度だったようだ。彼らの海難事故は殆どなかったという。それほど海の気象知識に詳しく、予知能力も高かったという。主に沿岸を走る地乗り航路を採用し、岩や漂流物を見分けにくい夜の航行はしなかった。海の真中を走る沖乗り航路は時間は短縮できるが、危険な岩があり、潮流も急で、海賊の出没も多く避けた。

海の民には蛇信仰がある。遠く大陸の中国江南地方や東南アジアにも蛇信仰がある。また、縄文中期の土器にも蛇体紋様がある。瀬戸内の金比羅さんも蛇信仰と関わりが深い。さらに、高知県沖の島には龍神が祀られている。蛇は穴ごもりや脱皮という生態から再生の象徴とされる。あるいは一日続くという交尾から強い生命力の象徴ともいわれる。さらに、蛇は龍につながり、龍は天にも昇り、水と雨を支配する神とされる。海に鉄を落としてはならないという海民の禁忌は蛇が鉄を嫌うことからきているのであろう。

一方、親鸞や蓮如の教えが海や川を伝って海民に広がったという指摘もある。鞆の浦に本願寺という寺があり、ここに蓮如の母が隠れ住んでいたという伝説がある。

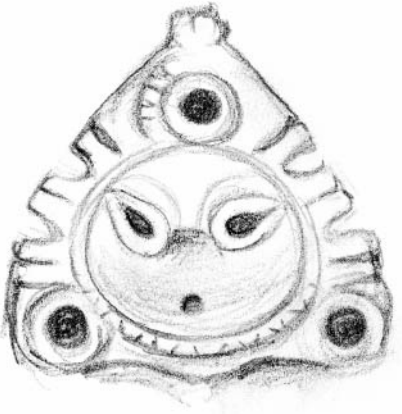
また、役の行者小角が伊豆へ流される前に瀬戸内海の大三島の賀茂神社を訪ねたという記録があり、海の民が山の修験道の始祖ともつながっているというのは奥が深い。

家船の民は船の中を優劣・浄不浄とわけて使っていた。船首に神棚を祀り、船尾で炊事や用便をした。左舷と右舷もそのように使いわけていた。

彼らの伝承は体験と口伝であり、文字は必要でなかった。縄文の系譜が感じられる。

常に親子一緒の船暮らしだが、子供は長男から順に出家していく。最後まで親船に残って親の倒をみるのは、末子である。末子相続はアジア各地の漁労民や狩猟民にみられる。隼人も末子相続である。芸予諸島では漁民だけでなく農民も末子相続を行っている。このような相続制度は夫婦単 の家族が均等に維持されて、平等な関係が保たれ、相互扶助の関係が継承される。自然の摂理が働いている。

縄文の末裔



1　岡本太郎

岡本太郎は一九五二年頃、日本人として世界で初めて縄文土器を日本の伝統と芸術の問題として取り上げた。しかも、それは考証や分類にとらわれることなく、真正 から本質に迫るものだった。

まず、彼は、縄文土器の紋様や形態の相貌について、その超日本的な、驚くほど激しく、強い美しさがどこから出てきたかを問う。隆線紋は獲物を追い闘争する混沌を示しており、形態の左右不均斉は破調とダイナミズムを示しているという。狩猟採集という不確かで、非情な生活は、超自然的な力と均衡の上に成り立っていたとみる。そして、日本人の伝統はここにあると主張する。

次に、彼は、縄文土器に驚くべき空間性をみる。そこには獲物の気配を察知し、その置を的確にとらえる三次元的感覚があるという。鋭い空間感覚があったが故に縄文土器には的確で精緻な空間の把握があるというのである。そして、その縄文人の空間とは現

実に征服されたスペースであった。

更に、彼は、縄文土器の異様な神秘性に注目する。この時代はすべてが宗教的であり、呪術的だった。それはあたかも現代における金のような存在だった。狩猟採集は常に偶然に左右され、何か超自然的な意志に頼らざるをえない。すべてに霊があり、その好意と助けにすがらなければ狩猟採集はうまくいかなかった。このような目に見えないものに呼びかける呪術がいつも必要だった。縄文土器はある獲物そのものであり、これに呪術で魔力をかけ、おびき寄せて捕らえた。霊が宿る獲物は神そのものだったが、その神は再生する。再生するからこそ縄文人は神を殺して食べたのである。

縄文人の日常生活は、それ自体が宗教であり、呪術であった。彼はこれを『精神主義的でない精神のありかた』だという。あらゆる神秘や超自然のドラマが、平気で、そして豊かに、積極的な現実性をもって生活に入りこんでいる。

2　宗左近

詩人・宗左近は日本人の母胎は縄文だと断言する。縄文は日本の精神史のなかに組み入れられていないけれども、縄文こそ日本人の精神の母胎であると言い切っている。そして、縄文に戻って、そこから日本人の歴史を捉え直すことが大切だという。

彼の縄文観はこうである。

縄文は宗教社会だった。単なるアニミズムと呪術を越えて神を持っていた。その根拠は、まず、土器と土偶の形体と表情に一目でわかる強い特性があること。そして、すべての土器は楕円活動を行いながら天空への螺旋上昇運動をしていること。さらに、新潟県糸魚川支流の姫川にしかない翡翠の勾 や大珠が遠隔の遺跡から出土していること。土器や土偶は祭器であり、翡翠の作品は巫女が身につけた祭器であり、日常的に大きな祭りが行われていた。

縄文の宗教は多神教だった。土器が噴火する火山を象徴する自然神であり、土偶が集

落の祖先を象徴する祖先神だった。

縄文の神は愛の神だった。それはすべてのものに宿り、万物を愛した。何故なら、縄文人は自給自足し自立していたので他者を侵す必要がなかったからである。彼らの寿命は三一歳と短命であったが、死はそのまま愛の神の懐へ入ることだった。これに対して弥生人の神はすべて知の神であり、支配の神だった。

外来文化のすべてを日本化する力の母胎は縄文の神である。例えば、十世紀末の天台宗が唱えた「草木国土悉皆成仏」は、無機物にも魂があるとする縄文の信仰が、インド・中国直輸入の前衛思想に変改を迫ったものである。

紀元前一万年前の縄文人が何故土器を焼いたのか、宗左近は次のように言う。

第一の契機は火山である。柔らかい土を火に入れて硬くすることを覚えた。

第二の契機は死と死体である。火山の爆発と噴火によって多くの死者が出た。焼かれて肉体が無くなる。焼かれてなお無くならない肉体を神に祈った。祈るために、火山そのものを粘土で造形した。これが土器である。だから土器は神そのものの象徴であり、

祭器なのである。

縄文の土器も土偶もすべてが芸術である。芸術とは巨なるものへの訴えのよすがであり、祈りの祭器である。殆どの考古学者は、土器を煮炊きと盛りつけの道具だというが、大半の土器はとても綺麗である。火や煙の跡がついているものは少ない。

3　笹谷政子

音楽家にして画家、その豊かな感性から日本人と日本語に深い関心を持ち、独学で研究を行う。狭隘で独善的な学者の論理に満足せず、直観と全体観を大切にしながら本質に迫る。その生き方と主張はまさに現代の縄文人である。

力作の「異説・日本民族の起源」（上・中・下―Ⅰ）、「日本語の起源」（第一部・第二部）から、言葉に残る縄文をご紹介しよう。

日本は縄文時代以降、二回にわたって異言語・異民族の渡来があり、その都度民族も言葉も変わった。

旧石器人・縄文人の時代はスラブ語（印欧語）、弥生・古墳時代はトルコ語（ウラルアルタイ語）、そして飛鳥・奈良・平安時代は朝鮮語（ウラルアルタイ語）が入り、日本の言葉はこの三民族・三言語の混交語である。

縄文時代の言葉はさまざまな形で残っているが、ロシア語ではないがロシア語に近いスラブ語は長たらしくてわかりにくい。現代に残る縄文語は、スラブ語の語頭とアクセントのようである。古事記を記述した太安萬侶は朝鮮からの渡来人の二世だったので、「上古の言葉は長たらしくて 倒くさいので一語で表した」と言っているし、「風土記」には「好字を宛てよ」としており、日本語には母音で終わる二音言葉が多い。

〇地名に残る縄文語

富士山＝エフージャ（流失）、伊豆＝イズヴエルジエーニエ（噴火）、恐山＝ソリファターラ（硫気孔）、雲仙岳＝ウニジェンヌイー（虐げられた）、諏訪湖＝スヴァリーツアー（ころげ落ちる）、琵琶湖＝ヴィーワリツア（転げ落ちる）、安曇川＝アド（地獄）、尾瀬＝オーゼラ（湖）、滋賀＝シカールヌイ（華麗な、粋な、すてきな）、潟（八郎潟・象潟・平潟港・難波潟・潟沼など）＝カタストローファ（大惨事、破局、天変地異）、小国＝アゴニ（火）、箱根＝アグネ（火）、熱海＝アタム（原子、微、霧を吹くこと）など。

〇魚名に残る縄文語

タイ＝タイナヤルィバ（神秘な魚）、ニシン＝ニーシチエンスカヤルィバ（乞食魚）、サバ＝サバーカ（犬）、フグ＝フクースナヤルィバ（美味な魚）、サワラ＝サヴァーラ（サワラ）など。

〇植物名に残る縄文語

カシワ＝カシェヴァール（炊事係）、ユリ＝イユーリ（七月）、スミレ＝スミレーンヌィー（つつましやかな）、クレナイ＝クレョン（カエデ）、栗＝バクリートイーグラミ（イガに覆われた）など。

〇爬虫類に残る縄文語

亀＝カメネーチ（石のように固くなる）、ヤド＝ヤドヴィータヤヅメヤー（毒蛇）など。

〇道具に残る縄文語

臼＝ウスタナヴィーチ（固定する、据え付ける）、杵＝キネティチェスキー（運動する）、皿＝サラート（サラダ）、蔵＝クラドヴァーヤ（倉庫、物置、宝庫）、へっつい＝ペチ（かまど、暖炉）、タガ＝タガン（火にかける鉄架）、欄干＝ラームカ（枠組）など。

〇人体に残る縄文語

アシ＝アスナヴァーニエ(柱脚や基礎)、テ＝チェフニカ(技術)、カラダ＝カローダ(丸太)など。

〇自然界に残る縄文語

空＝ソラ（太陽)、霞＝カスミーチェスキー（宇宙の)、星＝フォスフォール（蛍光体)、峰＝ミネラール（鉱物)、石＝イスカバエムィー（化石の)、海＝ウミヴァーチ（洗う)、波＝ナミヴァーチ（流れが運ぶ)、水＝ミチ（洗う)、砂＝スナシヴァーニエ（摩滅、浸食)、島＝シマト（かけら)、雨＝アミヴァーチ（水で濡らす）など。

〇枕　詞

「ささなみの」＝サスナー＝松の意（松多き、松青き)

「しきたえの」＝スキターツァー＝遍歴する、放浪する、漂泊する意（さすらいの、旅の夜の)

「石走る（イワバシル）」＝石が走るの意。

4　司馬遼太郎

司馬遼太郎は日本の文化を農耕文化とし、それ故にアイヌも縄文人も日本文化の源流にはできないという。本当の日本は江戸時代の文明、江戸文明にあったと考えている。文明をコントロールした唯一の例外は世界史上徳川時代しかないと言い切る。

そういいながら、この人の思考は極めて縄文的だと思う。その名言を拾ってみたいと思う。

文明は本来機能的である。それを裏打ちしている文化はすべて不合理である。不合理さが裏打ちされずに、文明と機能性だけが先行すると人間の住む社会ではなく

なる。人間は文明といずれ心中するのだろう。人間は文明という保温器の中で生きて、自然の生物活動の能力を失いつつある。臓器移植をして三年ほど生命を伸ばしたって に意味のあることではない。

一つの文化で日本人は呼吸し、泣いたり笑ったりしている。だから、普遍性を受け付けなくなる。そして、日本人は自分たちの文化には原理的なものを持っていないと思いこんでいる。

一つの種が百億まで増えて、他の動物や植物に打撃を与えつつ生きるなんて確かにおかしい。

古来、政治は「人間」を相手にしてきたが、突如生物としての「ヒト」を相手にせざるを得なくなった。

日本の歴史は縄文以来、飢えるかもしれないという恐怖心の歴史である。

モリという言葉自体にも神聖という意味が入っている。樹木を守らない文明は滅びる。

土地は本来天のもの、人のものではない。人は使用権を得ているだけ。土地は公有制にすべきだ。

大人の想像力はせいぜい地上をかすめて地上から少し離陸する程度だが、子供の想像力は天空までいって花を咲かせる想像力である。

子供は大人の父。子供の心を持たない大人はつまらない。子供の心を持たない人は、イマジネーションも倫理観も信頼できない。

縄文人にだってきちんと礼儀作法があって、貝を食べたらきちんと葬っている。生活の基盤として一番大切なのは礼儀作法である。

商人や芸術家は生活を賭けた緊張感をもって毎日を過している。死まで働けるような自分を在職中から育てあげるべきだ。

人間関係は相手の身になって考えてはじめてうまくいく。

出典は、「司馬遼太郎がゆく」（プレジデント社）、「日本人への遺言」（朝日新聞社）、「日本人を考える」（文春文庫）。

5　五木寛之

講談社から「日本人のこころ」全六巻が出ている。自らを「在日日本人」と称するこの作家は、母国である日本のことを実は殆ど知らないといい、そこに深い不安を感じている。「日本人のこころ」はこれが出発点になっている。それは日本人の精神基層を訪ねる試みであり、縄文につながる。

彼の問題意識はこうである。

歴史をふりかえることは、将来どうしていくのかと考えるのに等しい。

日本の近代は根底から幻だったのではないか。

日本人の魂、日本人の精神はまさに危機に瀕しているように見える。危機に瀕した日本人の魂や精神を救えるとしたら、それは「情」（本当の心）というものを回復して豊かに充実させる以外にないのではないか。

本当の和魂は、名もなく生きた人たちのなかに求めるべきではないか。民草といわれ

る草のごとき大衆の間につい先ごろまでしっかりと熱く流れていたもの、それが本当の和魂であり、日本のこころだ。

自分たちが学んできた、あるいは教えられてきた歴史とは全然ちがう日本の姿というものが、この列島の地底に熱く横たわっている。

彼が取り上げた和魂の主を紹介しよう。

九州南部、鹿児島・熊本・宮崎の一部には三百年にわたって浄土真宗の禁制がしかれていた。そこには隠れ念仏という真宗門徒がいた。彼らは命がけで信仰を守り、自分たちの食べる分を食べずに京都の本山へ志を届け続けた。御同朋という四民平等の講を持ち、命がけで隠れ念仏洞へって信者同志が強く連帯していた。弥陀一仏を至上の救主としたため禁制は過酷を極めたが、転向を拒み、一揆で立ち向かい、それも適わときには逃散という最後の抵抗も行った。人と人の絆が信仰の共同体をゆるぎないものにしていた。

東北には隠し念仏、に御内法という真宗門徒がいた。御内法とは、彼らが表法という

表向きの考え方に対して、親鸞・蓮如の流れから密かに伝授された教えである。彼らは宗教統制を行う幕藩権力と、その末端組織に組み込まれた真宗寺院の両方から信仰を守ろうとして隠した。在家信仰として、お寺を持たず、檀家なく、お布施なしを貫いた。

百姓の持ちたる国・加賀共和国は、長享の一揆（一四八八年）から金沢御堂の陥落（一五八〇年）までの約百年、民衆が祭政一致の政治を行った。信長が躍起になって潰そうとしてなかなか潰せなかった浄土真宗の寺内町である。

五木寛之は、大和の歴史の暗部に埋められた先住民・土蜘蛛や国栖や熊襲や蝦夷についても触れている。

さらに、流民である家船や山家を取り上げ、エタや非人といわれた人々の「情」にも踏み込んでいる。

私は五木寛之が明かそうとしている民草の「情」に縄文人の魂をみるような思いがする。

6　今西錦司

今西錦司は登山家・学術探検家・学者として有名である。私は、中でも学者としての遍歴に縄文人の末裔を感じる。

この人は、先ず昆虫学から出発し、生態学、動物社会学、霊長類学、人類学へと進み、最終的には自然科学を超えて自然学に至る。

登山家としてはマナスル初登頂に道を拓き、日本の千五百五十二山に登っている。

学術探検家としては北部大興安嶺縦断学術探検を行っている。

そして、学者としては棲み分け理論、今西進化論、自然学の提唱という実績を持つ。

棲み分け理論はカゲロウの幼虫の観察から立てられた。カゲロウの幼虫には、まず、岸辺近くの泥や細かい砂が沈積した流れの緩やかな川底にいるタイプがいて、魚に襲われると地盤に潜りこむものと泳いで逃げるものがいる。さらに、流れの速い小石や岩が

ゴロゴロしている川の中心部にいるタイプがいて、魚に狙われると小石の間に身を潜めるものとその場を離れず泳いで逃げるものがいる。カゲロウの幼虫にはこのように四つの生活形があり、お互いに対立しながら、補い合い、一つの生活形社会をつくっている。

今西進化論は、地球上に最初に発生した生物が分化発展して今日に至っているという点でダーウィンと一致しているが、分化発展の要因をダーウィンが生存競争による適者生存と突然変異としたのに対して、共存している個体も種全体も適切な時期に変わるべくして変わるとした。

一九八三年、八一歳の今西錦司は、自然科学者であることを廃業して、進化は変わるべくして変わってゆくと言い、自然学を提唱する。

すべてのもとは自然であり、自然を客観的に扱うのではなく自然に対して自己の内に自然の見方を確立しなければならない。生物の生きている自然を全体としてとらえる。そのためには直観と類推という方法論が重要である。特に、直観がないと全体感が生ま

れない。学問を細かく専門に分けて、それらを全部集めても全体はわからない。全体は全体としてとらえなければわからない。自然に身を委ね、自然に沿う生き方をしていたからこそ縄文人には自然の全体が直感的に理解されていたのだろうと思う。今西錦司はその意味でまっとうな縄文人だったのだと思う。

縄文の末裔としての今西錦司の名言をいくつか拾ってみよう。

単独生活者の間には文化というものはない。文化はやっぱりひとつの共有だから群れ生活者になってはじめて文化が生まれてくる。

自然観というものを教えてくれたのはじいさん、ばあさん。自然観が確立していたら、その人の人生観とか世界観というものも右へならえしてくる。

故郷のイメージとなると同郷人の間でも必ずしも同じではない。各人の経験の差や文化の違いがあるのだから違うのは当たり前である。それにもかかわらず、誰でもが故郷

に対するノスタルジーをいだくとすれば、無意識の世界に隠れた原帰属性（プロトアイデンティティ＝もともとおなじものであるという認識）に対する郷愁ではないか。

弥生文化人は西南日本から、縄文文化人は東北日本からスタートして、混合樹林地帯をたどっているうちに、どこかでくわし、混合樹林地帯のうえで、仲良く文化を混合することによって、やがて日本文化を形成していったことであろう。

7　西岡常一

最後の宮大工棟梁。法隆寺金堂、法輪寺三重塔、薬師寺金堂・西塔など檜の巨木を使って堂塔の復興をたした。

一九〇八年生まれ。法隆寺棟梁西岡常吉の孫として、幼少から仕事場で鍛えられ、農業学校を経て宮大工の道に入った。農業と宮大工は異質のように見えるが、これは祖父

が、「百姓をせんと本当の人間ではない。土の命をしっかり見てこい」といって、引いた孫の宮大工への道だった。木を知るには土を知れ、土を知らずに本当の大工にはなれないという哲学が背景にある。物凄い自然の因 律である。

宮大工は元は「寺社番匠」といわれ、寺が抱えていた。寺社番匠は寺からその石高に応じた年俸をもらっていた。仕事がなくても汚れるので民家は建てられなかった。仕事のない時は百姓をして自給自足をしていた。宮大工は自然に密着した生活と仕事をする百姓大工だった。明治の廃仏 釈で社より上の寺がなくなり、宮大工と呼ばれるようになった。

宮大工としての西岡常一の生き方は縄文人そのものだったと思う。生きとし生けるものは自然の分身、木も人間も自然の分身、自分が生きているのではなく天地の間に命をもらっている木や草やほかの動物と同じように生かされている。人間の心もまた自然の中にある。神も仏もみんな自分の心の中にある。この人は心底こう考えて宮大工に徹した。

だから、宮大工の仕事は塔を建てることに仕えたてまつること、儲けとは違う。心に欲があってはいけない。仏になって堂を作る、神になって宮を建てる、人間の魂と自然を合作させたものが堂であり、宮であるという。

彼は、大自然の中に生かされていることを体で知っていた飛鳥人を理想とし、「自然と共に生きているというのでなければ文化とはいえないと言い切る。そして、現代人について、「一度余裕をなくして儲けを追いだしたら、時間を待つこともできないし、休むこともできない。仕事が細かく分業になって、自然とのつながりがわからなくなった。」と嘆く。

西岡常一の仕事は、土を知り、木と話し合い、檜を使って千年の堂塔を作ることだった。それは先ず太古からの知恵に従っていた。「日本書記」の記述にこうある。

「スサノオがひげをまくと杉が生え、胸毛をまくとヒノキが生え、尻の毛をまくとマキが生え、眉毛をまくとクスノキが生えた。ヒノキは瑞宮に、杉とクスノキは浮き宝（船）

に、マキは棺に使え。」

それ故宮大工は檜を使う大工なのである。

そして、仕事の仕方は法隆寺の棟梁に伝わる口伝に従った。

一、神を崇めず、仏を拝せずして堂塔伽藍を口にすべからず。

一、伽藍造営には四神相応の地を選べ。

伽藍を造営するなら、東の青竜には清流、南の朱雀には沼や沢、西の白虎には白道、北の玄武には山のあるような立地を選び、南に し北を背にするように造営せよということ。

一、住む人の心を離れ住居なし。

一、堂塔造営用の用材は木を買わず山を買え。

ひとつの山ではえた木をもってひとつの堂塔をつくること。そして、伐採され製材されてからではなく、木がはえている山へ行き地質を見、環境による木の癖を見抜いて買えということ。

一、木は生育の方 のまま使え。
東西南北はその方 のままに、峠および中腹の木は構造材、谷の木は造作材に使えということ。こういう使い方をすれば、樹齢千年の檜は堂塔としても千年もつ。生きてきただけの耐用年数に木を生かして使うことは自然に対する人間の当然の義務である。
一、堂塔の木組は木の癖組。
例えば、右捻れと左捻れを組み合わせれば部材同士の力で癖を封じて建物全体のゆがみが防げるというようなこと。
一、木の癖組は人の心組。
大勢の職人の心を棟梁の心構えと同じように仕事に立ち向かう心構えにすること。
一、工人の心組は工人への思いやり。
棟梁には、至らない工人でも建物が完成するまでには立派な宮大工に仕立てようという思いやりが必要だということ。
一、百工あれば百念あり。一つにする器 のない者は自分の不徳を知って、棟梁の座

を去れ。

一、諸々の技法は一日にして成らず、祖神達の徳恵なり。

千年以上の時間をかけて積み重ねてきた技法に感謝し、奢らず、正確に伝えなければならないということ。技術は自然の法則を人間の力で征服しようとするが、技法は自然の生命の法則のまま生かして使う。そして、頭で考えたことをやってみて手に移す、技は手の記憶である。

8　甲野善紀

失われた精妙な古武術の術理と技法の探求をしている人である。何故、古武術なのか？最初は「自然食」、転じて「宗教」、やがて「人間の運命は決まっているが同時に自由である」という結論に達する。そしてそれを体感・実感するための「武術」へと進む。

この人の根源の問いは「人間にとって自然とは何か」であるが、その解を武術の稽古による身体感覚を して求めようとしている。一見脈絡のない話であるがこうである。例えば、動物園のアザラシやアシカやオットセイは浅いプールから深いプールに移されると溺れそうになるという。彼らにとって泳ぎは本能に充分刷り込まれてはいないらしく後天的な学習によって巧みな泳ぎを身につける。ところが犬や猫は生まれてすぐに水に入れても泳げるから、これは泳ぎが本能にインプットされていることになる。人間はというと、泳ぎだけでなく基本的な生活技術の本能がない。言葉も食べ物も生活習慣もどんな民族にも共 の生き方はない。つまり、人間にとって自然はない。その分人間は常に不安にさらされてきた。この不安を解消するために二次的に本能にかわる文化を創りだしてきた。それが科学や宗教である。

古来、武術には術と呼べる身体の使い方があった。スポーツと違って、武術では準備運動はしない。身体各部が 々に同時に動き、身体全体をうまく組み合わせて使うからで

ある。身体の動きの質の違いによって相手を制圧できた。この古武術が、江戸以降、勝つことではなく精神の修養が大切とされ、技は方便といわれるようになって変質し身体論を消してしまった。だから、彼は武道とは言わずに武術と言っている。

この人は映画「もののけ姫」を観て物凄いショックを受け、その後遺症が四年以上続いたという。「今は本当に絶望の擂鉢の底にいる」、「自然はいいなあと言っていたことの甘さ」、「人間は動物のように本当に自然の中で自然と一体となってはくらせない」、「人間の業の深さ」、こういうことを思い知らされたと述懐している。

人間界は、庶民の隅々までハイテクの恩恵を受け、その代償として自然を破壊し続けている。その結が、すべてを過保護にしている異常な社会状況であり、そこで異常な反応が起こるのは当然である。

彼が現時点で到達している身体論は次のとおりである。

現代の武術やスポーツはその殆どが、タメをつくって力をだす傾向にある。これは支点をもち、身体の部分を使って行う運動であって、力は出せるが時間と距離がかかり気配が出る。効率が悪く相手に読まれる。

身体各部を細かく割り、その細かく割った部分が群泳する魚が瞬時に同じ方向に向きを変えるように身体を使うことができれば、早く効率よく疲れない。支点のある運動の力よりも強い力も出せる。身体を回さない、捻らないように使う。そうすれば、タメやアソビがなくなり、全身が直接的に関連して動く。身体じゅうを割って、詰まりをなくし、支点を消すと身体じゅう全部が直接参加できる。彼はこれを「井桁崩し」といい、平行四辺形を潰すことにたとえている。

稽古は、丹田、つまり、下腹部を自覚することだという。丹田に動きの焦点があると、支点のあるふんばった動きになりにくい。アソビのない動きになり、余分なところに力が入らず、また抜けたりもしない。全体が均等に使われる。総和的な動きができる。身体各部にかかる負担が減る。こうして身体の自立性を呼び戻すことができる。結 的に体

感を して自分の行動の是非を決定できる。

現代の運動選手の怪我や病気や短命は、この丹田の鍛錬をせず、胸腹部の内臓を無理に圧迫し、中心力と部分力の比例を破り過激な衝動を与えることに原因があるとみる。

彼の武術論によれば、身体の動きから自然を観ることができる。支点を消しタメをつくらないように身体の動きを質的に変換することを じて、人間社会の本質に迫ることができる。本質的なことを本気で考えることが生き甲斐を生み、人間に成長をもたらす。ここから、人々の役に立つことを自他ともに誇れる社会を展望することも可能ではないかと思う。甲野善紀はまさに現代の縄文人である。

9　宮崎　駿

世界的なアニメーター。この人が関わった作品の何かを殆どの人々が観ている筈。ア

ニメ映画やテレビのほかに本もあるが、作品を挙げてみよう。

「わんわん忠臣蔵」「狼少年ケン」「ガリバーの宇宙旅行」「少年忍者風のフジ丸」「ハッスルパンチ」「太陽の王子ホルスの大冒険」「レインボー戦隊ロビン」「魔法使いサリー」「長靴をはいた猫」「空飛ぶゆうれい船」「ひみつのアッコちゃん」「砂漠の民」「どうぶつ宝島」「アリババと四十匹の盗賊」「長くつ下のピッピ」「ルパン三世」「赤銅鈴之助」「パンダコパンダ」「荒野の少年イサム」「侍ジャイアンツ」「アルプスの少女ハイジ」「フランダースの犬」「母をたずねて三千里」「あらいぐまラスカル」「未来少年コナン」「赤毛のアン」「ルパン三世カリオストロの城」「風の谷のナウシカ」「ニモ」「名探偵ホームズ」「シュナの旅」「柳川堀割物語」「天空の城ラピュタ」「となりのトトロ」「火垂るの墓」「魔女の宅急便」「おもひでぽろぽろ」「紅の豚」「そらいろのたね」「なんだろう」「平成狸合戦ぽんぽこ」「耳をすませば」「ＯＮ　ＹＯＵＲ　ＭＡＲＫ」「もののけ姫」「千と千尋の神隠し」……。

私自身が度肝を抜かれた最後の二つの作品に触れて、この人は全く現代の縄文人だと思った。

「もののけ姫」という映画は、犬神のモロに育てられた野生の少女サンと、弱い立場の者を集めて山を切り拓き鉄を造り帝国をつくっているエボシ御前との対決が軸になっている。これに、エボシ御前の石火矢の弾を受けてタタリ神となり、村を襲った猪ナゴを倒してその呪いを受けた少年アシタカが絡む。自然に沿う生き方をするサンと、自然を管理しようとするエボシ御前の生き方を して人間を問い直す映画である。

この映画は敵と味方、善と悪という構図ではなく、人間には自然に沿うという本質と同時に、自然から自由でありたいという本質もあるといっているように思える。すべての存在がさいわいになるという結末が、そのことを象徴しているように思う。監督の宮崎駿自身が、この映画のダメージは大きいし、つらいだけの作品だったと言っている。縄文人の祈りは実はここからきているのではないかと思える。

「千と千尋の神隠し」という映画は、四年前の「もののけ姫」で終わってもよかった筈なのに、これをやれたことは幸せだったと宮崎駿自身が述懐している映画である。

そのあらすじは、魔法の力で豚にされてしまった両親を、神々が疲れを癒しにくる湯屋という異界に入り込んで助けだすというもの。千尋は極く普 の両親を持つ十歳の普の女の子。千尋は何か特 の力を持つのでもなく、凄い助けにすがるのでもなく、浸食し喰い尽くそうとする世の中で、本当の自分の願いに出会い、自分の居場所を見つけて、生きるために働き、取り付く島のない連中に自分を認めてもらう努力をする。千尋の中に本来あったものがあふれでてきて、両親を異界から取り戻す。

この映画は、十歳の少女を具体的に想定してつくられたという。そして、その少女が本当の自分になって観る映画になっているように思う。生きるために働くと決めれば力は出るし、生きていくことはただごとではないと感じさせる。何よりも普 の女の子が自分の中から生きる力を出せるということを教えてくれる。

宮崎駿は、人間に成長なんてないという。成長とは何者かになるために多くのものを失うことだという。千尋は成長したのではなく、両親を豚にされて一人放り出されて、自分のもっている力が出てきたのである。

子どもは大人への準備期間ではないともいう。子どもは格 の時代なのであり、この時代を格 に生きなければならないし、そういう子ども時代を大人がキチンと保証しなければならないのだと思う。

縄文の手ざわり

縄文復元画家　安芸早穂子

仕事柄、縄文遺跡の発掘現場を数多く訪ねます。運がよければ半ば土に埋もれたままの土器片が美しく濡れて光っているのを見たり、完全な姿で出土した土偶を触らせてもらうこともあります。

新潟と山形の県境を流れる三川上流に、奥三遺跡群という「縄文集落」がありました。その遺跡調査室は、廃校になった村の小学校に間借りしていましたが、そこで私は人付注口土器と呼ばれる出土品を心ゆくまで触らせてもらったことがあります。人がつけられた縄文の容器の中には、中空土偶と呼ばれる文字どおり中が空になった土偶もありますが、いずれも人形でもあり、器でもあるミステリアスな造形です。人土器には胎児の

骨が納められていることもあり、古代人のせつない思いにふれる「遺物」のひとつかと思います。

ところが、この奥三 の人 はちょっと地中海の出身かとでも思うハイカラなヒゲ に、ぽってりとした胴がついていて、何やら平穏なユーモアさえ感じさせました。酒器と考えたらずいぶんしゃれたデザインのものです。すっぽりと両手のひらにおさまる形といい、黒く光沢のあるなめらかな表 といい、とてもさわり心地のよい器です。私はふと、頭のてっぺんに開かれた穴から、お腹の向こう側の足先の穴へ息を吹き込んだらどんな音がするだろうと思いました。天気のよい日で、県境の朝日連峰が見渡せる午後でした。人気のない木造校舎の窓から風のため息のような音が、低く静かに響いてゆきました。

あちこちに水の湧く泉をもち、三筋の谷が交わる台地にストーンサークルをもつこの端正な縄文の村が、ダム湖の底に沈んだのはその翌年のことです。私にとっての奥三 縄文村の記憶は、音と手ざわりとして残りました。

奥三 に辿り着くには車でも新潟空港から五時間程かかります。フツーの人なら、発掘現場へのアクセスはホームページですますことでしょう。そういう時代を私たちは生き

ています。画像と文字でできた情報の処理に追われて、生理的に許容できるナワバリを犯され続ける満員電車の人間関係でとても疲れてしまいました。

絵を描く私が言うのは変ですが、私たちの今の暮らしも考えも、視覚に偏り過ぎているのは確かです。逆に、嗅覚・触覚・第六感と、生命の根源的なところに直結している感覚は古代人からすると無いに等しくなっているのじゃないでしょうか。プラスチックに手ざわりを奪われていても知育玩具であるなら、感覚育玩具こそ必要かと思う昨今です。

そういう思いもあって、昨年大阪の街中で会社のひける時間に「縄文体感ワークショップ」を始めました。縄文を愛でる会ではありますが、彼らの作品の美と技を見るばかりで賞賛するのはいささか不心得な気もしますので、実際にコピーをつくってみようという会です。縄文人とてユートピアに暮らした由はなく、むしろ夜毎死と闇の恐怖を忍び、天災におののき、息をひそめて災いが立去るのを待つ強烈なストレスを生きていたかもしれませんから、止むにやまれず、作らずにはいられないという状況で生まれたモノとして、恐れや悲しみを封印してゆくためのカタチとして、これらの造形を受けとめても

よいのではないか。ならば、結 としてのカタチより、作ってゆく経緯に癒しのプロセスがあると思うからです。

私は土器の 真を矯めつ眇めつ眺めることが好きですが、そこにあるのは本当にめくるめくダイナミズムです。特に表と裏が交錯し、空間がよじれ絡んで集散を繰り返す紋様に出会うと、その制作現場はいったいどんな状況だったろうと考えます。口を半ば開けて、小さな唸り声を漏らしながら、一心不乱に土と格闘するヒト、棟方志功が版木を彫る時のような、柳宗悦がいう「念仏の境地」のような、もの作りの佳境の神がかり的なヒトの光景が目に浮かびます。「無我の境地」でしょうか。それが恐れを祈りに昇華してゆくためのイニシエーションではなかったか。悲しみに区切りを打つための時と労働ではなかったかと思います。土器を使うことが目的でなく、作る作業そのものが目的だったのではないかと思うのです。

土粘土をこねるときのネトネトとまつわりつく手におえない感触、それが段々と手になじんでくると、ひんやりとした土が如何なる力も豊かに受けとめてくれていると知る心地よさ。今の日常では起すこともなく眠っていた指のあらゆる の触覚がひとつひとつ

目覚めてゆくようなショックは、仮死者の蘇生の呼吸のようです。身を委ねたくなる土塊を征して、形を造り出してゆく過程では、克服感すら感じることができるでしょう。できあがりは、はっきりいってどーでもいいのです。岡本太郎言うところの「狩人の空間センス」は、現代人の遺伝子には、佐藤さん、とても見つけにくくなったのではないでしょうか。しかし、インドの女神像の腰のくびれのように生理的に「気持ちのいい」曲線が、謎をかけるように現れ、消えて、再び顔を出すときはヘビの頭部であったりする縄文時空で、土器が生まれる手ざわりを経験する時、指から手のひらから皮膚の感覚が覚醒し、神経細胞を じて五感が息を吹き返す、その小さな息吹が、平 的なくらしに貼りついた憤りやあきらめを、ちょっとポジティブにとらえ直させてくれないか。させてくれたらいいなと思っています。

　このワークショップのおかげで、佐藤眞生さんにお会いすることができました。拙画を依頼下さったことに合わせて、この拙文を書く機会を与えて下さったことに感謝致します。

縄文の遺伝子　－受け継がれる縄文魂－

2004年3月　3日　紙版第1刷発行
2011年4月20日　デジタル版発行

著　者 —— 佐藤　眞生
装　画 —— 安芸早穂子
発行者 —— 桐生　敏明

紙版発行 — 株式会社 かんぽうサービス
デジタル発行 — 株式会社 シルクふぁみりり
電話 0745-60-2696 ／ FAX 0745-60-3098

©2004 Printed in Japan
ISBN4-900277-39-8